

大阪市住吉区

南住吉遺跡発掘調査報告

Ⅲ

大阪府住宅供給公社による建設工事に伴う発掘調査報告書

2004.5

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市住吉区

南住吉遺跡発掘調査報告

Ⅲ

大阪府住宅供給公社による建設工事に伴う発掘調査報告書

2004.5

財団法人 大阪市文化財協会



古代の掘立柱建物群(南から)

大阪市住吉区

南住吉遺跡発掘調査報告

Ⅲ

大阪府住宅供給公社による建設工事に伴う発掘調査報告書

2004.5

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

南住吉遺跡は、大阪市南部の住吉区と東住吉区にまたがる縄文時代から江戸時代にかけての遺跡で、古代には住吉大社や津守廃寺などの寺社が造営され、幹線道路としての「磯齒津路」が整備されるなど、摂津国(職)住吉郡の中心に立地していたと考えられている。

今回の調査地は遺跡の南西端に位置してはいたが、古代の掘立柱建物と櫓のほか、旧石器時代から江戸時代にかけての遺物も数多く出土しており、遺跡がさらに西方へ拡がる様相を示していた。また、細江川の支流を良好な状態で検出したことは、古環境や地形を考える上で貴重な資料であり、当遺跡の実態がより明らかにされていくものと期待される。

最後に、発掘調査および報告書作成にご協力を賜りました、大阪府住宅供給公社ならびに周辺住民の方々を始めとする関係者の皆様に、心より厚く御礼申し上げるとともに、今後ともより一層のご支援をお願い申し上げます。

2004年 5 月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪府住宅供給公社の委託を受け、2003年3月から7月にかけて住吉区殿辻1丁目目で実施した住宅建設工事に伴う発掘調査(MN02～6次、MNは南住吉遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪府住宅供給公社の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋覚の指導のもと、同課主任学芸員黒田慶一・小倉徹也が担当した。調査の面積・期間などは第Ⅱ章第1節に記した。
- 一、本書の作成は調査課長京嶋覚の指揮のもと、2003年11月25日から2004年5月31日にかけて行った。本文の執筆は調査課長京嶋覚と黒田・小倉のほか同課小田木富慈美が分担した。執筆分担については文末にその名を記した。英文目次および要旨の作成は英国ケンブリッジ大学大学院中西裕見子氏に依頼した。編集は小倉・小田木が協議のうえ行った。
- 一、発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の方々から御教示、御協力を賜った。記して深謝の意を表したい(順不同・敬称略)。
那須孝博(大阪市立自然史博物館)、佐藤隆春(大阪府立三国ヶ丘高等学校)、松田順一郎(財団法人東大阪市文化財協会)、井上智博(財団法人大阪府文化財センター)、真鍋篤行(香川県立高松高等学校)
- 一、遺構写真は小倉が撮影し、遺物写真の撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
- 一、基準点測量はアジア航測株式会社に委託した。
- 一、自然科学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の多大な協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995b]に準じる。また、本書で用いる基本層序の地層名は地層番号の前に「南住吉」を付して「南住吉〇層」とし、図表等では南住吉遺跡の調査略号である「MN」を付して「MN〇層」あるいは「MNO」とした。
2. 遺構名の表記は、掘立柱建物(SB)、横(SA)、柱穴・ピット(SP)、溝(SD)、井戸(SE)、土壇(SK)、その他(SX)の分類記号の後に、本調査次数の番号を付している。なお、遺構番号の先頭には検出面の地層番号を冠しSB501(第5層検出のSB01)のように表記した。自然流路には分類記号を与えず、そのまま遺構名とした。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±〇m」と記した。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は世界測地系2000に基づいている。
4. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。本書では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[佐原眞1968]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1966]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、瓦器類：[鈴木秀典1982]

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地と既往の調査	1
第1節 遺跡の立地と地形概要	1
第2節 既往の調査	5
第Ⅱ章 MN02-6次調査	7
第1節 調査の経緯と経過	7
第2節 層序と遺物	9
1) 沖積層(難波累層)	9
2) 低位段丘構成層	14
3) 中位段丘構成層	14
4) 各層出土の遺物	16
第3節 遺構と遺物	30
1) 古代以前の遺構	30
2) 中世以降の遺構	38
3) 遺構出土の遺物	39
第Ⅲ章 調査成果の検討	43
第1節 南住吉遺跡の基本層序の再検討	43
第2節 自然科学分析	47
1) はじめに	47
2) 調査地点の層序概要および試料	47
3) 分析方法	48
4) 結果	48
5) 考察	55
第3節 まとめ	58
引用・参考文献	59
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

報告書抄録

図 版 目 次

1	北壁地層断面・細江川支流 上：中央部北壁地層断面 中：東端部深掘りトレンチ北壁地層断面 下：細江川支流内の流木および樹木根痕検出状況 (北東から)	遺構検出状況(西から) 中：第4a層上面江戸時代の遺構検出状況(東から) 下：SK401完掘状況(西から)
2	細江川支流・古代の遺構 上：細江川支流河岸の樹木根痕検出状況 中：古代の遺構(西から) 下：SB501(北から)	5 出土遺物(一)石器遺物 6 出土遺物(二)弥生土器・円筒埴輪・土師器・須恵器 7 出土遺物(三)須恵器 8 出土遺物(四)須恵器 9 出土遺物(五)陶磁器・陶硯・銅製鈴・銭貨 10 出土遺物(六)土師・イダゴ壺 11 出土遺物(七)瓦 12 花彫化石 13 大型植物遺体 14 木材(一) 15 木材(二)
3	古代の遺構 上：SB504検出状況(北から) 中：SP523柱材検出状況(西から) 下：SP540柱材検出状況(南から)	
4	古代・江戸時代の遺構 上：第5a層上面江戸時代の遺構完掘状況・古代の	

挿 図 目 次

図1	南住吉遺跡の位置	1	図18	瓦実測図	28
図2	大阪平野とその周辺の地形分類	2	図19	銅製鈴実測図	29
図3	周辺の遺跡	3	図20	古代以前の遺構平面図	30
図4	過去の調査地と立会調査の位置	5	図21	古代の遺構分布図	31
図5	調査区配置図	7	図22	SB501平・断面図	32
図6	模式地層断面図	9	図23	SB502・503平・断面図	33
図7	北壁・東壁・拉張区北壁地層断面図	12-13	図24	SB504平・断面図	34
図8	南壁地層断面図	14-15	図25	SB505平・断面図	35
図9	南北トレンチ地層断面図	15	図26	SA501・502平・断面図	35
図10	石器遺物実測図	17	図27	中世の遺構平面図	36
図11	縄文土器実測図	18	図28	近世の遺構平面図	36
図12	各層出土遺物実測図(1)	18	図29	SE401平・断面図	37
図13	各層出土遺物実測図(2)	21	図30	近世以降の遺構平面図	38
図14	各層出土遺物実測図(3)	22	図31	遺構出土遺物実測図	40
図15	各層出土遺物実測図(4)	24	図32	遺跡周辺の旧地形と柱状図の位置	43
図16	各層出土遺物実測図(5)	25	図33	南住吉遺跡の柱状対比図	44-45
図17	土師・イダゴ壺実測図	26	図34	主要花粉化石群集の層位分布	50

表 目 次

表1	おもな既往の調査一覧	6	表6	放射性炭素年代測定結果	49
表2	調査地の順序	10	表7	暦年較正結果	49
表3	南住吉遺跡の基本層序	11	表8	花粉分析結果	51
表4	土鍾計測表	27	表9	大型植物遺体分析結果	52
表5	銭貨計測表	29	表10	樹種同定結果	54

写 真 目 次

写真1	調査風景	7	写真3	SE401	37
写真2	第5b層出土葎石	16			

第I章 遺跡の立地と既往の調査

第1節 遺跡の立地と地形概要

南住吉遺跡は大阪市住吉区南住吉を中心とし、大領・長居・長居西・長居東・刈田・我孫子東・我孫子・我孫子西・東住吉区長居公園にまたがる南北約1km、東西約1.5kmの楕円形の範囲にある。縄文時代から江戸時代の複合遺跡で、北部に戦国時代末期の城館址と推定される寺岡砦跡を半ば包括している(図1・3・4)。

本遺跡は東の河内平野と西大阪平野を分けて、ほぼ南北に延びる上町台地の南部に位置している(図2)。上町台地は大阪城付近を北限とし、大阪市南方にいたる南北10km余り、東西幅2～3kmの洪積段丘である。その台地面は大阪城から天王寺にかけてはTP+25～15m、天王寺より南ではやや高度を下げてTP+15～10mとなり、大和川以南では徐々に高度を上げて泉北丘陵につらなる。台地西側は急傾斜で落ち、あるいは崖を成し、西大阪平野と埋立地を経て大阪湾にいたるが、東側は緩やかに傾斜して河内平野に没する。大局的には北から南へ、西から東へ傾斜する地形を呈している。台地西縁に沿って続く直線的な急崖は断層崖ではなく縄文海進時の波食崖と考えられており、上町断層はその西側を南―北から南南西―北北東方向に走っている。北への延長は千里丘陵西縁を南北に走る佛念寺山断層につながり、南へは堺市の大仙古墳以南で数本に分かれて、坂本断層や久米田池断層につらなる。これらを一連の断層群と捉えて上町断層帯ともいう。

台地上には現在も清水谷や細工谷など、谷の地名を残す起伏のある地形を呈している。本遺跡には中央部から西方へ流下する細江川があり、住吉付近では谷を刻んでいる。

上町台地上には本遺跡のほかにも多くの遺跡が存在している(図3)。以下、住吉地域の遺跡群について、各時代ごとに概観する。

中期旧石器時代では山之内遺跡でナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石が検出されているが、人類の痕跡はまだ発見されていない[大阪市文化財協会1998b]。

後期旧石器時代では西方に位置する住吉大社旧境内遺跡で、サヌカイト製のナイフ形石器の系譜をひく石核が採集されており[石神怡1983]、山之内遺跡でサヌカイト製剥片が平安神宮火山灰層(始良-Tn火山灰:AT)の下

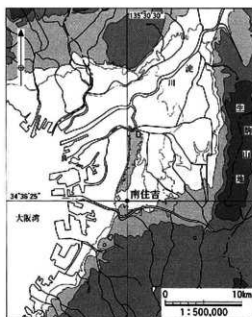


図1 南住吉遺跡の位置

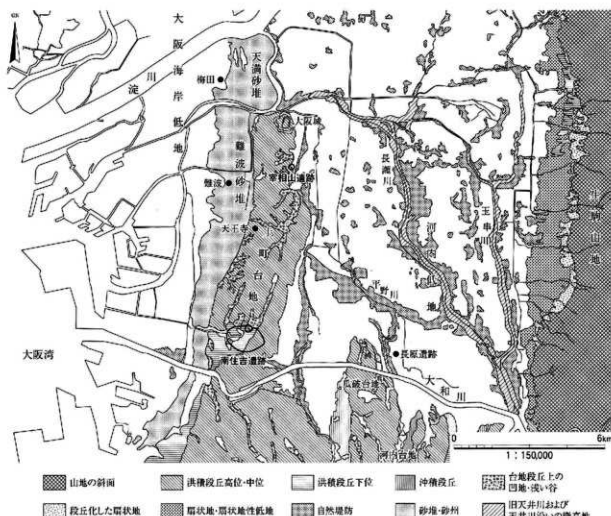


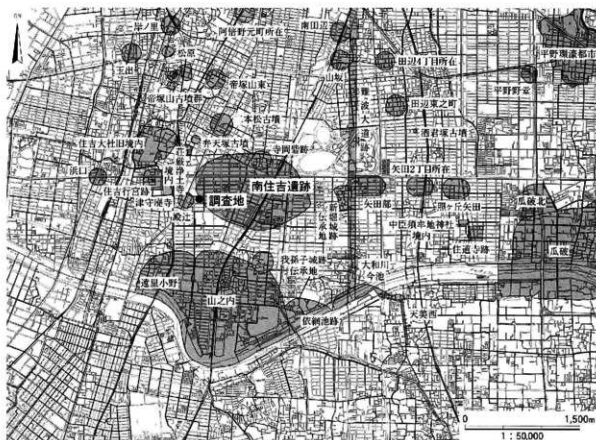
図2 大阪平野とその周辺の地形分類 (土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

位から発見されている。また、後世の遺構からではあるが今回の報告例ほか1地点でナイフ形石器が出土しており[大阪市文化財協会1998b]、今後、石器製作址が発見される可能性もあろう。

縄文時代では遺構を伴わないが、後期の土器片と石鏃が出土している。また、山之内遺跡では前期にさかのぼる爪形文を施した土器や、晩期の滋賀里Ⅲa式土器・突帯文土器・石鏃が見つかった[大阪市文化財協会1998b]。

弥生時代になると本遺跡で遺構・遺物が認められはじめる。前期は遺物のみであるが、中期には数地点で集落に関連する遺構が確認されている。周辺の遺跡では、山之内遺跡で前期から遺構・遺物が見られるようになり、中期には飛躍的に増加して、遺跡南部を中心に住居跡や方形周溝墓が確認されている。しかし、中期後半になると遺構・遺物ともに減少することから、集落は衰退したと推定され、後期には遺構・遺物はごく少量しか見られないことから、この時期の集落は存在しないようである。山之内遺跡で集落が衰退する一方で、周辺の遺跡では後期の遺構が確認されている。遠里小野遺跡では円筒形の管状土鍾が出土し[藤岡謙二郎1942]、本遺跡の東方に位置する照ヶ丘矢田遺跡[古市晃・杉本厚典1997]や矢田部遺跡[大阪市文化財協会1998a]においても同じ頃の遺構が確認されている。

古墳時代中期にいたって、大阪湾を望む上町台地上に前方後円墳の帝塚山古墳がつくられる[大阪



市文化財協会1998a]。現在、大阪市内で埴丘が良好に残存している唯一の古墳である。山之内遺跡では堅穴住居や掘立柱建物・土塼などの遺構が検出されており、再び集落が営まれるようになる。古墳は確認されていないが、埴輪片が出土している。このほかに遊離資料ではあるが、円筒埴輪片が住吉大社旧境内遺跡[前田豊邦1983]や本遺跡で見つかっている。

古墳時代後期から飛鳥時代では山之内遺跡や遠里小野遺跡で多数の掘立柱建物群が検出されている。特筆すべきは遠里小野遺跡で発見された桁行15.4m、梁行13.8m、面積が212.5㎡もある巨大な掘立柱建物である。周囲には建物をを中心に南北76m、東西94mの範囲に溝を巡らせ、建物を囲っている。規模が巨大であること、正方形の平面形をもち柱が太いことから相当の高さの建物と推定され、西側の海岸部にあったと推定される港湾施設に伴う、儀式などの特定の用途をもつ建物と想定している[大阪市文化財協会1999a]。また、本遺跡では6世紀の終わりから8世紀初めと推定される16棟の掘立柱建物群が検出されている。5時期にわたって建物が造られており、住吉地域における官人層の末端に連なる有力氏族の居住地と推定されている[大阪市文化財協会1998a]。

また、山之内遺跡で鰐羽口や鉄滓など鍛冶関係の遺物やこれらを含む遺構が多く見つかったことは注目される。遠里小野遺跡では鏡状土製品・滑石製品など祭祀に係わる遺物が多量に出土しており、勾玉・管玉・白玉などの未製品や加工前の石材・剥片・チップなども数多く見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1994]。住吉大社旧境内遺跡から本遺跡北西部にかけての範囲には、6世紀後半から7世紀にかけて掘立柱建物群が形成され、莊嚴淨土寺境内遺跡でも6~7世紀代

の遺物が多く採集されている[堀田啓一1979a・b]。また、白鳳期と推定される瓦片がこれまで山之内遺跡・遠里小野遺跡・津守廃寺[藤森栄一1967]で確認されている。

奈良時代になると本遺跡では遺構・遺物が僅少となるが、山之内遺跡では掘立柱建物が見つかったりしている。

平安時代以降では津守廃寺における発掘調査で9世紀後半～10世紀前半の井戸や、古代と推測される掘立柱建物が検出されている[高橋工1989]。瓦が多数出土したことで知られる莊嚴淨土寺境内遺跡では[植木久1988]、2002年度に本格的な調査が実施され、鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている[大阪市文化財協会2004]。また、山之内遺跡では掘立柱建物や溝などが見つかったりしているが、遺構・遺物ともに減少しており、本遺跡でもそれらの出土は散発的となる。

以上のことから、弥生時代までは本遺跡の南側、上町台地でもやや低い場所に当る山之内遺跡や遠里小野遺跡の周辺に遺構が多く、人間活動の痕跡がはっきりと見られるが、本遺跡では遺構は検出されていない。弥生時代中期になって本遺跡内でも集落が形成されるようになり、古墳時代から飛鳥時代にかけては西方の細江川下流域を中心に神社・寺院もつくられ、本遺跡内でも北西部一帯に掘立柱建物群が営まれるようになる。その後の時代については攪乱が遺構面まで及んでいることも大きな要因の一つと考えられ、遺構・遺物の検出数は減少する。

第2節 既往の調査

本遺跡が発見されたのは1959年にさかのぼる。当時、大阪市立我孫子中学校の教諭であった瀬川芳則氏によって、土取りや住宅建設の工事中に、本遺跡を含む遠里小野・山之内遺跡などの計10地点において遺物が採集された[瀬川芳則1959]。本遺跡範囲内では住吉第7～10地点がこれに当る(図4)。住吉第7地点(長居東4丁目)では石鏃と土錘などが、住吉第8地点(南住吉2丁目)では石鏃、須恵器甕・甕、土師器杯・イイダコ壺が、住吉第9地点(南住吉1丁目)では須恵器片が、住吉第10地点(南住吉2丁目)では須恵器片が採集されている。これらの発見によって、埋蔵文化財の包蔵地として知られるようになった。

本遺跡での最初の発掘調査は、住吉第8地点内で1980年10月に行われた(80-1次調査)。以来、財団法人大阪市文化財協会が大阪市教育委員会と連携して調査に当り、2003年度までにおおよそ740地点で立会調査が行われた。本格的な発掘調査は19地点で実施され、その調査総面積は約8,637㎡である(表1)。市営住宅等の建替えに伴う調査が面積的には多くを占め、民間住宅の建設に伴う調査の大半は小規模なものである。

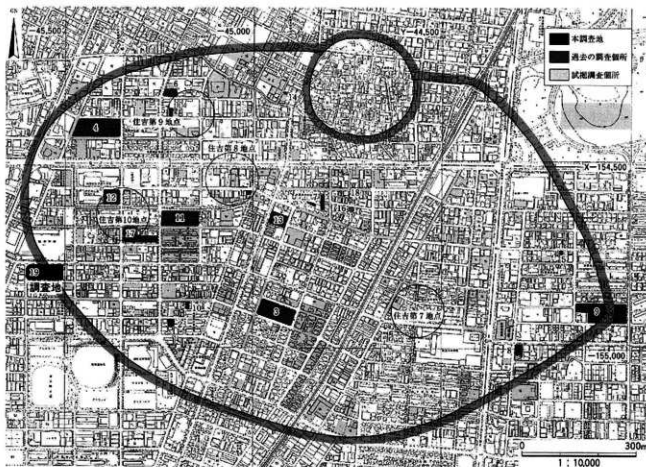


図4 過去の調査地と立会調査の位置 (大阪市地形図(大阪市総合計画局1984)に加筆)

表1 おもな既往の調査一覧

番号	調査回数	調査場所	面積(m ²)	おもな遺構・遺物	引用・参考文献
1	80-1次	南住吉2丁目7	27	弥生時代～古代の遺物、近世の遺構、細江川の氾濫原?、段丘構成層中の暗色帯	[大阪市教育委員会ほか1982]
2	82-2次	南住吉3丁目7	40	古墳時代後期の土壌・溝、古墳時代～室町時代の遺物	[大阪市教育委員会ほか1984]
3	85-19次	我孫子西1丁目10	650	細江川支流と考えられる溝、近世の土取り穴群・流路・炉壁	[大阪市文化財協会1998a]
4	85-37次	南住吉1丁目21	1,900	Ma12層、縄文以前の暗色帯・石礫、飛鳥時代の掘立柱建物・柵・溝・小溝群・土壌・落込み、平安時代の溝、中世の小溝群、近世の井戸・土取り穴・小溝群	[大阪市文化財協会1998a]
5	86-2次	長居東3丁目13	110	近世の遺構・遺物	[横山洋1988]
6	86-40次	南住吉1丁目9	280	古代以前の暗色帯・割木痕、平安時代後期の火葬墓、室町時代の耕作溝	[京崎寛1988]
7	86-48次	長居西3丁目2	680	縄文時代以前の暗色帯・化石林、弥生時代の石礫・石庵丁、中世の井戸・溝、近世の流路・井戸・溝	[大阪市文化財協会1998a]
8	87-21次	島田2丁目9	76	古代の土壌・ビッド群、中世の溝	[大阪市文化財協会1998a]
9	88-17次	長居東3丁目20	2,175	古代以前の暗色帯、中近世の遺構・遺物	[大阪市文化財協会1998a]
10	89-25次	南住吉3丁目8	103	縄文時代の石礫、中世の遺構・遺物(瓦器・管状土層)	[櫻井久之1991]
11	90-25次	南住吉2丁目11	6	地山を確認、時期不明の暗色帯	[大阪市文化財協会1998a]
12	90-29次	南住吉2丁目20	22	弥生時代の剥片、中世の遺物	[大阪市文化財協会1998a]
13	93-7次	長居西3丁目5	270	弥生時代の堅穴住居・土壌・石礫・石小刀、近世の井戸	[大阪市文化財協会1998a]
14	94-16次	大福町5丁目12	20	中世の耕作溝	[大庭重樹1996]
15	95-1次	南住吉1丁目10	147	中世の火葬墓?・溝、近世の土壌	[大阪市文化財協会1998a]
16	95-20次	長居4丁目3	30	弥生時代前期の遺物、中期の井戸・暗色帯、古墳時代中期の韓式系土器など、後期の遺構・遺物、飛鳥時代の遺構、奈良時代の井戸など	[清水和明1997]
17	99-9次	南住吉2丁目15	343	海成層、古代～中世と推定される土壌	[大阪市文化財協会2002]
18	01-14次	長居4丁目40	30	中世の溝・柱穴	[大阪市教育委員会ほか2001]
19	02-6次	船江1丁目	1,715	古代の掘立柱建物・柵・溝、細江川支流、旧石器～近世の遺物	本書

本遺跡が重要性を増したのは、1985年に飛鳥～奈良時代の掘立柱建物群が発見されてから後である(85-37次調査)。ここでは削刺をまぬがれた一區画に掘立柱建物を16棟検出している[大阪市文化財協会1998a]。それらは6世紀の終わりから8世紀初めと推定される建物群であるが、建物群廃絶後も銅製の鉤具が出土した条里方位に合致する溝が存在する。翌年度に行った86-40次調査では平安時代の火葬墓と考えられる遺構が発見されている。

一方、弥生時代の遺物が遊離資料ではあるが蓄積され、付近に遺構が存在する可能性が高まってきた。そして、1993年に初めて弥生時代中期の居住域が確認された(93-7次調査)。1995年にはこの東方でも、中期の井戸が見つかった(95-20次調査)。さらに、ここでは畿内第Ⅰ様式新段階の土器も確認され、弥生時代における活動時期を前期にまでさかのぼらせた点において注目される。また、これよりも古い暗色帯が地山直上や段丘構成層中でも確認されており、長原遺跡や山之内遺跡の層序との対比や、遺構・遺物の確認も課題といえる。

さらに今回の調査では、遊離資料ではあるが、後期旧石器時代のナイフ形石器と縄文時代草創期の有茎尖頭器など、旧石器から縄文時代にわたる遺物が一定量出土していることが特筆されよう。

過去20年以上にわたって蓄積したデータは、近・現代の擾乱が深くにまで及んでいるため遺跡の保存状態が悪く、市内の他の遺跡に比べるとかなり断片的なものである。ようやく、弥生時代以降の土地利用の様相とその変遷がおぼろげながら予想できるようになった段階である。

(小倉徹也・小田木富慈美)

第Ⅱ章 MN02-6次調査

第1節 調査の経緯と経過

調査地は殿辻1丁目にあり、南住吉遺跡のほぼ西端に位置する(図4)。大阪府住宅供給公社によって府営住宅の建替え工事が計画され、大阪市の埋蔵文化財包蔵地内に位置していたため、まず建設工事に先立って2002年3月5日に試掘調査(MN01-38次)を行った。その結果、現代盛土下に中世と考えられるピットが検出され、中世以前の地層が良好に残されていることが確認された。これを受けて、発掘調査を実施することになった。

本調査は2003年3月11日に開始した。まず、敷地の南側に住宅の建設予定個所に合わせて東西に調査区(94m×16m)を設けた(図5)。重機によって現代盛土を除去した後、以下を人



写真1 調査風景

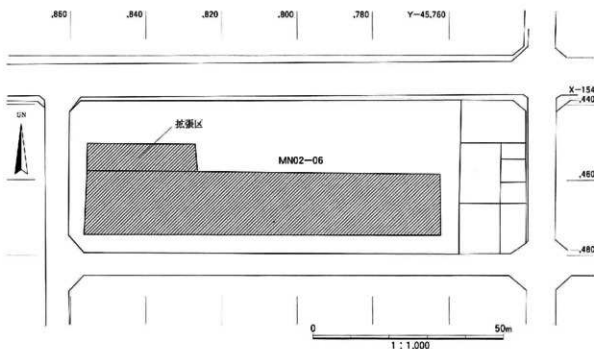


図5 調査区配置図

力によって掘下げた。その結果、飛鳥～奈良時代と考えられる複数の掘立柱建物や柵 多数の柱穴と細江川の支流などが良好な状態で発見された。掘立柱建物がさらに北側へ続くことが明らかとなったため、調査区を拡張し(29m×7m)、掘削・記録作業を行った。拡張部分を合わせると調査面積は、1,715㎡となる。2003年6月12日と7月3日には写真測量を実施し、その間の6月29日には周辺の住民を対象とした現地説明会を行った。7月24日に器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

第2節 層序と遺物

部分的な坪掘りを含めて、現地表面下約7m(TP-2.5m)までの地層を観察した(図6～9、図版1)。その結果に基づいて本調査地の層序を組立て(表2)、南住吉遺跡の基本層序[小倉徹也2002](表3)との層序対比を行った。以下に各層の層相やその特徴を記す。沖積層最上部層および上部層の名称については[趙哲済2003]に従った。なお、遺構出土の遺物については第3節で詳しく述べることにする。

1) 沖積層(難波累層)

沖積層最上部砂層(難波累層上部砂層の上半部相当層)

第0層：現代盛土層および攪乱層で、層厚は100～130cmである。南住吉0層に対比される。

第1層：現代作土層で、層厚は10～25cmである。南住吉1層に対比される。

第2層：砂混りシルトと砂からなる近代とみられる作土層で、層厚は70cm以上である。さらに上部・中部・下部に細分される。上部は黄褐色の極粗粒砂ないし細礫混りシルト質粗～中粒砂からなる。層厚は20cm以上で、調査区西端にのみ分布する。中部は暗灰黄ないし灰黄色の粗～中粒砂質シルト、シルト質粗～中粒砂からなる。層厚は20cm以上で、西端にのみ分布する。下部は暗灰黄色の細礫～粗粒砂混りシルトからなる。層厚は最大で60cm、平均10～30cmである。本層上面でSD201・202、SP201を検出した。南住吉1層に対比される。

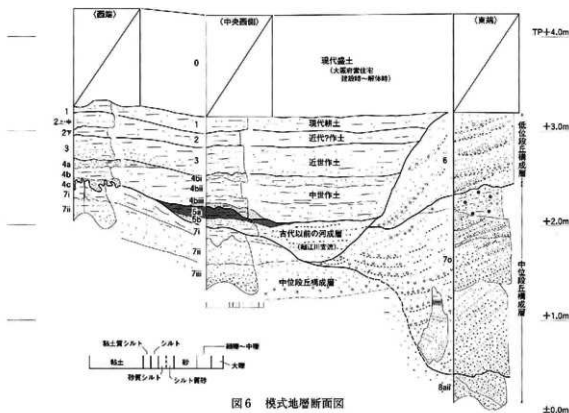


図6 模式地層断面図

表2 調査地の層序

MN02-4層序	岩相	色	層厚(cm)	自然現象ほか	遺構	おもな遺物	時代	住吉基本層序との対比
第0層	現代土および機具層	—	100~130	埋込層	—	—	現代	MN0層
第1層	現代耕土	—	10~25	—	—	—	現代	MN0層
第2層	上部：黄褐色 極粗粒砂・細粒砂リット質層・中粒砂 (西道のみ分布) 中部：暗灰色・灰黄色 粗・中粒砂質シルト シルト質層・中粒砂 (西道のみ分布) 下部：暗灰色 細粒・極細粒砂リット	2.5Y 5/3 2.5Y 5/2 2.5Y 6/2 2.5Y 5/2	20± 20± 60± (10~30)	—	—	—	近代?	MN1層
第3層	上部：黄褐色 シルト質粗・中粒砂/シルト盛り延・中粒砂 (東道のみ分布) 下部：含粗粒砂・細粒 灰黄色・暗黄色 粗・中粒砂質シルト	10YR 4/3 10YR 5/2 2.5Y 5/2	50± 20~30	—	—	—	近世	MN2層
第4層	a 含細粒・極粗粒砂 暗灰色 粗・中粒砂質シルト i 含細粒・粗粒砂(中粒砂) 暗灰色 細粒砂質シルト 上部：含粗粒砂・中粒砂 暗灰色 細粒砂質シルト 下部：暗灰色 粗粒・中粒砂質シルト/シルト・極粗粒砂・細粒砂リット・中粒砂 上部：含細粒・粗粒砂 暗灰色 細粒砂質シルト (下位層を垂し上げ、5a層位埋含む) 下部：暗灰色 粗粒・中粒砂・細粒砂質シルト・中粒砂 暗灰色 粗粒・中粒砂・細粒砂質シルト 灰黄色 シルト・中粒砂・細粒砂リット・極粗粒砂 灰黄色 シルト質粗・中粒砂/細粒砂質シルト	5Y 4/4 5Y 4/1~4/2 10YR 4/1~4/2 10YR 4/3 2.5Y 3/2 5Y 2/1	15± 5~20 5~25 20~30 ≤10 ≤10	—	—	—	中世 i (古代)	MN3層 i MN4層
第5層	a 暗黄・黒灰色 中粒砂・中粒一部シルトや窓7層の隣接含む b 暗黄・黒灰色 中粒砂・中粒一部シルトや窓7層の隣接含む	5Y 2/1~4/2 2.5Y 3/2 2.5Y 5/2 2.5Y 3/2	15± ≤10 60±	—	—	—	—	—
第6層	i 灰黄色・灰褐色 中粒・中粒砂(ay d: 細粒・極粗粒砂) (上として系別に分布する。埋埋厚: N44W~74E, 18~20M) ii クサリ層を含む、白色のシルト・粘土が混入 黄褐色・明灰色 細粒・粗粒砂	10YR 6/4 10YR 3/5 10YR 5/6 7.5Y 5/6	≤90 ≤50	—	—	—	—	—
第7層	a 西側 灰白色 極粗粒砂・シルト/シルト、細粒砂質粗・中・極粗粒砂 (主に埋埋厚に) 東側 上部: 含シルト 灰灰・暗灰色 細粒・中粒砂 (砂埋: 酸化構造が観察される) 下部: 含乳白色シルト・クサリ層 (黄灰・灰灰色 中粒・中粒砂 (砂埋: 最上位にシルト状の 凝状の砂・細粒砂の砂。下層はクサリ層) i 含細粒・粗粒砂 灰黄色 粗・中粒砂質シルト・粘土 ii 含細粒・粗粒 灰・灰黄色 粗・中粒砂質シルト・粘土 シルト質粗・細粒砂(上部: 中・粗粒砂、下部: 粗・中粒砂) iii 含シルト) 灰色 中粒砂・中粒 (砂埋: 酸化構造が観察される)	2.5Y 5/6 10YR 3/2 2.5Y 5/6 10YR 5/4 5Y 5/4 7.5YR 5/6 5Y 6/6 2.5Y 6/8 10YR 5/6 2.5Y 7/3 10YR 7/1 10YR 6/4 2.5Y 7/4	≤60 ≤30 5~35 70~125 ≤55 ≤70 105±	—	—	—	—	—
第8層	a 暗灰色 中粒・中粒砂 (砂埋: 平均 d: 極粗粒砂、酸化構造が観察される) b 暗灰色 中粒・中粒砂 (砂埋: 平均 d: 極粗粒砂、酸化構造が観察される) i 灰黄色 中粒・中粒砂 (砂埋: 平均 d: 極粗粒砂、酸化構造が観察される) ii 灰黄色 中粒・中粒砂 (砂埋: 平均 d: 極粗粒砂、酸化構造が観察される)	2.5Y 5/3 10YR 4/4 2.5Y 6/6 2.5Y 5/3 10YR 4/4 2.5Y 6/6	ab.60 ab.6	—	—	—	—	—
第9層	i 灰黄色 中・細粒砂 (平行なラミナが観察) ii 含細粒・極粗粒砂 灰黄色 粗・中粒砂	—	30~35 ab.10	—	—	—	—	—
第10層	a 灰黄色 中・細粒砂 b 灰黄色 中・細粒砂	—	150±	—	—	—	—	—

— 上層部遺構 i 下層部遺構 △ 埋込層遺構 埋込層

第3層：砂混りシルト、砂質シルトと砂からなる近世の作上層で、層厚は80cm以上である。さらに上部・下部に細分される。上部は黄褐色のシルト質粗～中粒砂ないしシルト混り粗～中粒砂からなる。層厚は50cm以下で、先端にのみ分布する。下部は粗粒砂～細礫を含む灰黄褐色ないし暗黄灰色の細～中粒砂質シルトからなる。層厚は20～30cmである。本層上面でSD301、SP301～313、SE301を、下面でSD401・402を検出した。南住吉2層に対比される。

第4層は中世の作土層で、4a～4c層に細分され、4b層はさらに4bi～4biii層に細分される。南住吉3～4層に対比される。

第4a層：細礫～極粗粒砂を含む暗灰色の粗～中粒砂質シルトからなる。層厚は15cm以下である。上面でSD403～406、SE401・402、SK401～403、SX401～403を検出した。

第4bi層：細礫～粗粒砂ないし中粒砂を含む暗灰色の細粒砂質シルト～細粒砂混りシルトからなる。層厚は5～20cmである。

第4bii層：上部は極粗粒砂～中粒砂を含む暗灰色の細粒砂質シルト～細粒砂混りシルトからなり、下部は暗灰色の極粗～中粒砂質シルトないしシルト・極粗粒砂～細礫混り極粗～中粒砂からなる。層厚は上部が25cm以下で、下部が10cm以下である。

第4biii層：上部は細礫～粗粒砂を含む暗灰色の細粒砂質シルトからなり、下部は細礫～極粗粒砂を含む暗灰色ないし黒灰色の細～中粒砂混りシルト～粘土ないし粗～中粒砂・細礫混り細粒砂質シルトからなる。層厚は上部が20～30cmで、下部が15cm以下である。耕作時の攪拌によって取込まれた下位の第5a層の偽礫が特徴的である。

第4c層：灰黄色のシルト～中粒砂・細礫混り粗～極粗粒砂からなる。層厚は10cm以下で、調査区

表3 南住吉遺跡の基本層序

南住吉基本層序	岩 種	層 厚 (cm)	自然現象 ほか	遺 跡	おもな遺物	時 代
沖積層 (砂・シルト・礫・粘土層)	MN0層 現代盛土および機混層	—	褐色帯			現代
	MN1層 含細礫 暗褐色～黒灰色シルト・シルト質砂	10～15		→溝跡・土取り穴群・排水溝		近・現代
	MN2層 含細礫 黄灰～黄褐色 粘土質シルト・砂質シルト	10～30		→穴群・井戸	渡辺陶磁器	近世
	MN3層 含礫・砂 暗褐色～灰黄褐色 粘土質シルト・砂質シルト	10～35		→土境・ピット群	瓦葺・瓦質土器	鎌倉～室町時代
	MN4層 暗黄褐色～灰褐色シルト～粘土質シルト	10～20		→土境群		平安時代
	MN5層 暗黄褐色 砂質シルト～シルト質砂	5～30		→堀立柱建物群・溝・柱穴・溝		飛鳥～奈良時代
	MN6層 含細礫 黒褐色シルト～シルト質砂～砂	5～40				古墳時代
	MN7層 含粗粒砂～細礫 黒褐色シルト～シルト質砂	5～30		→堀立柱跡・柱穴・土境		古墳時代後期
低位段丘 堆積物	MN8層 暗黄褐色シルト混り中粒～粗粒砂	(不明)		→堀内溝遺構・凸基築基式石造		弥生時代中期
	MN9層 上部：灰～灰黄色 粘土質シルト・細粒砂 下部：灰黄～明黄褐色 砂礫	30～100			(西基無玉式石造)	縄文時代
	MN10層 黄白～灰白色シルト・砂質シルト	10～70		→河川段跡・乾堀		
	MN11層 暗灰色～黒灰色 砂質シルト～粘土(微質シルト)(有機質、泥炭質)	5～40		→板を張った木の化石、足跡化石状の跡み		
	MN12層 上部：黄褐色～灰白～灰褐色シルト・砂礫 下部：灰～暗緑灰～暗灰色シルト・粘土・極粗粒砂	40～220		→乾堀		後彌生～中期 旧石器
	MN13層 泥炭質 暗灰～黒灰色 細粒砂～礫質シルト～粘土(泥炭質)	10～35				
	MN14層 緑灰～黄灰色シルト・砂礫	30～110				
	MN15層 暗緑灰～灰色～黄灰色シルト・砂礫(油成層(Ma12))	ab.500		風穴		

凡例 一 上面検出遺構 ↓ 下面検出遺構

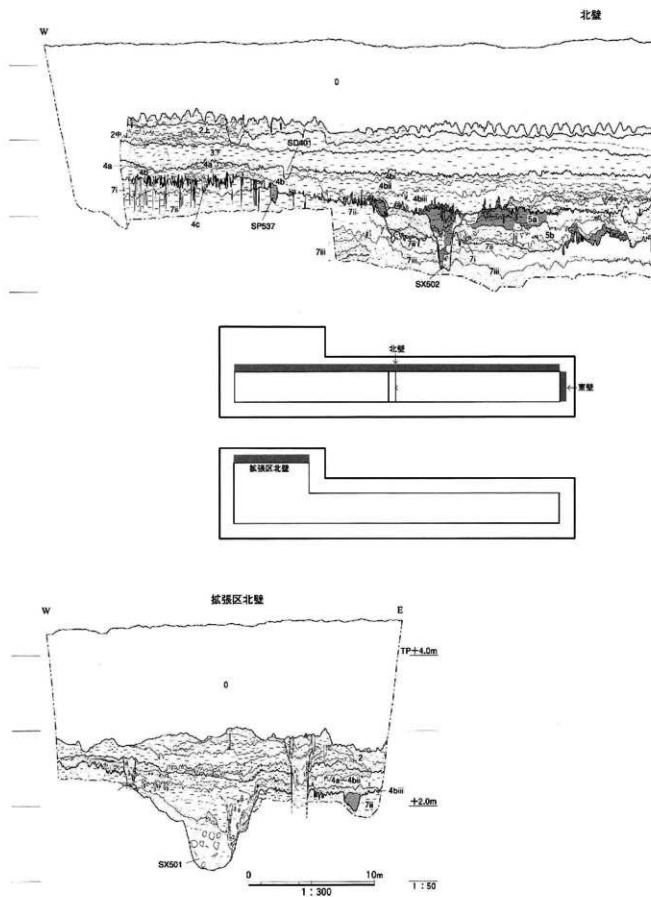
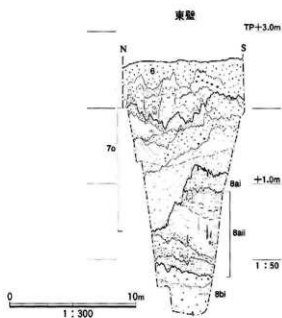
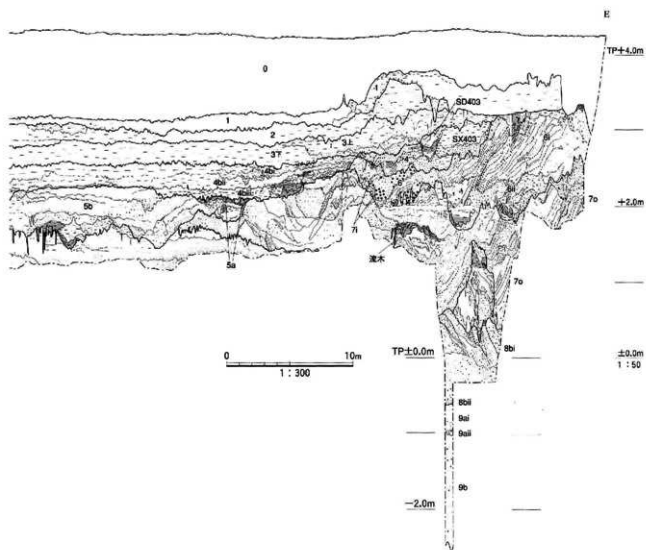
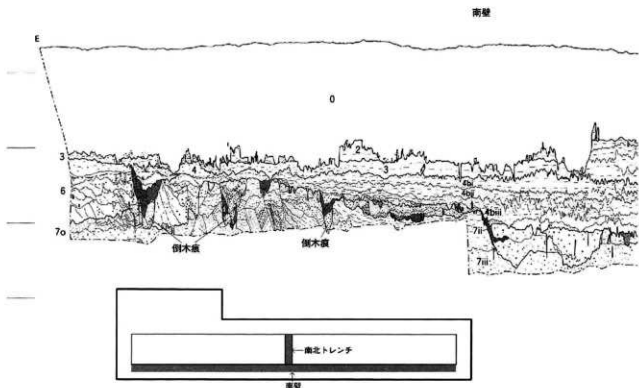


图7 北壁·东壁·紧张区北壁地层断面图





西端にのみ分布する。上面でSP401・402、SD407を検出した。

第5a層：黒色のシルト質細～中粒砂ないし細粒砂質シルトからなる湿性地堆積層である。主として後述する細江川支流を埋積した下位の第5b層の上位に発達する。層厚は10cm以下である。第4biii層の耕作時の攪拌によって上面は乱されてはいたが、上面でSB501～505、SA501・502、SD501～504ほか多数の柱穴を検出した。

第5b層：暗褐色ないし黒灰色の中粒砂～中礫からなる河成層で、シルトや下位の第7層の偽礫を含む。層厚は25cm以下である。上面でSX501を検出した。第5層は南住吉5～8層に対比される。

2) 低位段丘構成層

第6i層：にぶい黄橙色ないし黄褐色の中礫～中粒砂からなる砂礫層である。層厚は90cm以下で、主として調査区東側に分布する。上面で細江川支流とSD601を検出した。

第6ii層：クサリ礫様の風化した礫を含み、白色のシルト～粘土が混る黄褐色ないし明褐色の細礫～粗粒砂からなる砂礫層である。層厚は50cm以下で、主として調査区東側に分布する。下底部付近に白色ないし灰褐色のシルト～細粒砂質シルトからなる幅1.5～2.0m、高さ0.4～0.5mの扁平なブロックを包含する。圧密によるものとみられる変形構造(ブーディング褶曲?)が観察された。

第6i・ii層は南住吉9層に対比される。

3) 中位段丘構成層

第7o層：調査区東側では、上半部がシルトを含む黄灰色ないし暗褐色の細礫～中粒砂からなり、

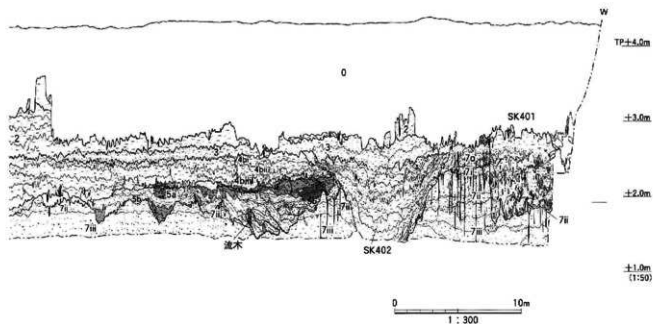


図8 南壁地層断面図

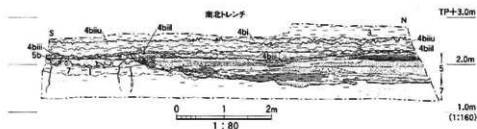


図9 南北トレンチ地層断面図

下半部が黄灰色ないし青灰色の中礫～中粒砂からなる河道堆積層である。層厚は110～180cmである。上半部では級化構造が顕著で、下半部最上部には塊状の中～細粒砂を薄層が挟在し、下部はラミナが顕著である。下半部に幅3.0m、高さ1.0mのブロックを包含する。河道の堆積層である。西側では南壁付近に小規模に分布し、黄白色の極細粒砂～シルトないしシルト、細粒砂混り中～極粗粒砂からなり、層厚は30cm以下である。これまでに観察されていない層で、上下の層序関係からここでは南住吉10層に対比しておくことにする。

第7i層：細礫～粗粒砂を含む黄灰色の細～中粒砂混りシルト～粘土からなる。層厚は55cm以下で、上面に乾痕が観察された。

第7ii層：粗粒砂～細礫を含む灰色ないし黄灰色の粗～細粒砂質シルト～粘土ないしシルト質粗～細粒砂からなる。層厚は70cm以下で、上面に乾痕が観察された。

第7iii層：わずかにシルトを含む灰色の中粒砂～中礫からなる砂礫層である。層厚は105cm以下で、級化構造が観察された。

第7i～iii層は南住吉12層に対比される。

第8ai層：灰色のシルト・極粗粒砂混り中～粗粒砂からなり、層厚は35cm以下である。下底部付近はやや暗色化する。岩相および特徴と上下の層序関係から第8ai層は南住吉13層に対比可能である。

第8aii層：上半部はわずかにシルトを含む暗褐色の極粗粒砂混り粗～中粒砂、シルト・細礫を含む青灰色の極粗～細粒砂からなる。下半部は青緑灰色の粘土～シルトを含む青緑灰色の中礫～中粒砂、淡緑灰色の粘土混り中礫～粗粒砂からなる砂礫層である。上・下半部を合わせた層厚は35～110cmである。上半部には級化構造が観察された。

第8bi層：暗灰色の中礫～中粒砂からなる砂礫層で、平均層厚は60cmである。級化構造が観察された。

第8bii層：灰色の細礫～中粒砂からなる砂礫の薄層で、平均層厚は6cmである。級化構造や顕著なラミナが観察された。

第8aii～8bii層は南住吉14層に対比される。

第9ai層：灰色の中～細粒砂からなる海成層で、層厚は30～35cmである。平行ラミナが観察された。

第9aii層：細礫～極粗粒砂を含む灰色の粗～中粒砂からなる海成層で、平均層厚は10cmである。

第9b層：灰色の中～細粒砂からなる海成層で、層厚は150cm以上である。硬質、塊状で淘汰がよい。

第9ai～9b層は南住吉15層に対比される。

(小倉)

4) 各層出土の遺物

石器遺物(図10、図版5)

出土した石器遺物はすべて遊離資料であるが、出土総数は30点以上にのぼる。これらの石材はほとんどがサヌカイトであった。それらの属する時代は後期旧石器時代から弥生時代まで長期にわたっている。特に弥生時代と思われるものが多いことから、調査地周辺に当該期の居住地があったことを窺

わせる。ただし、この中には細江川支流によって流されてきた遺物が多く含まれる可能性は否定できない。これらのうち11点を図示し、1点を写真2に示した。1～11はサヌカイト製の打製石器である。1は横長剥片を素材とした、一側縁加工のナイフ形石器である。ブランディングは主剥離面側からのみ行われている。後期旧石器時代のものであろう。長さは5.17cm、幅1.47cm、厚さ0.51cm、重量4gである。2は有茎尖頭器で、先端と基部、側辺を欠損する。現存長8.96cm、幅2.60cm、重量22gで、復元すると全長は約11cmとなる。右図右側辺の槌状剥離は中心線を越えて左側辺

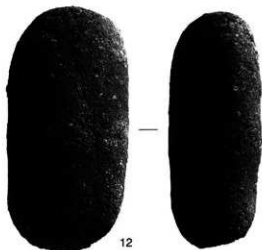


写真2 第5b層出土土版石(縮尺約1/2)

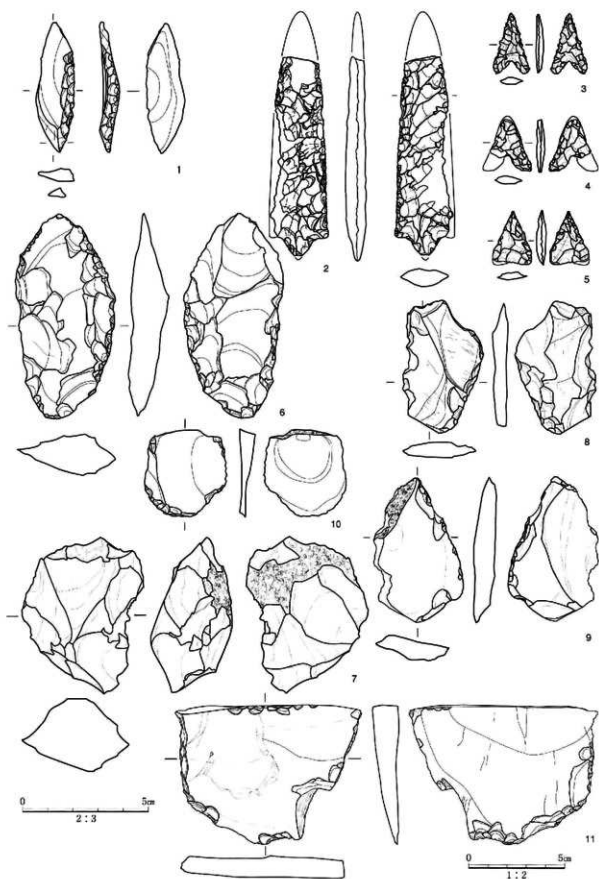


图10 石器遺物実測図

第4biii層(2・5・6・8)、第5a層(1・3・4)、第5b層(10)、不明(7・9・11)

に及んでいる。左図では左側辺の剥離の一部に右半部に剥離の末端が及ぶものが見られるが、全体として中央までのものが多い。側辺細部の加工は特にいいであるが、鋸歯状とまではいえない。逆刺は浅く、茎部の形状は逆三角形である。茎部全長は0.7cm以上で、身部と茎部の比率は1:11以上の、小瀬ヶ沢型と呼ばれる形状に属する。縄文時代草創期のものであろう。3~5は石鏃である。3は細身の凹基無茎式石鏃で脚部がやや短く挟りが浅い。側辺の形状は鋸歯状である。左図には素材となった剥片の剥離面を残す。4は凹基無茎式石鏃で、先端および側辺の一部と一方の脚を欠損する。挟りは深く円形である。5は平基無茎式石鏃で左図には素材となった剥片の剥離面を大きく残す。3・4は

その形状から縄文時代後半に属するとみられ、5は縄文時代後~晩期の所産であろう。6は両面加工石器で横長剥片を素材とし、両面から雑に加工して槍先状に仕上げている。弥生時代の可能性がある。7は拳大の礫を素材とする石核である。8は楔で、厚さ約1cmの剥片を素材としている。四周には加撃の結果生じたと思われる垂直方向の割れ面が並んでおり、打点部は潰れている。9~11は二次加工を有する剥片である。9は横長の剥片の主剥離面の末端部に両面から調整を加えている。この部分を刃部として使用した可能性がある。10は薄い剥片の主剥離面の末端部に、背面側か

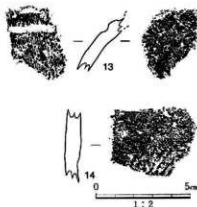


図11 縄文土器実測図

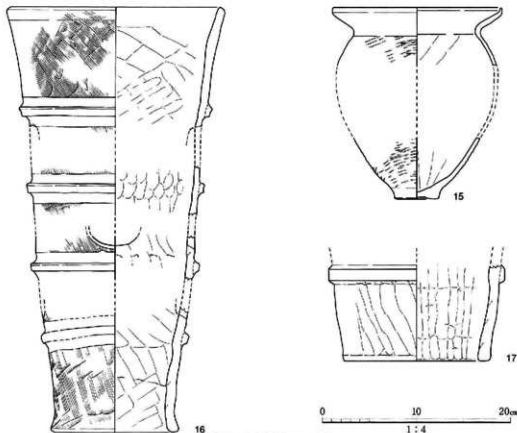


図12 各層出土遺物実測図(1)

第5b層(16)、第4biii層(15・17)

ら細かな調整を連続的に加えている。スクレイパー等として使用した可能性がある。11は大型の横長剥片の打面と主剥離面の末端に調整を加えており楔の可能性がある。12は砂岩製の敲石である(写真2)。敲打痕が上下に残る。長さ12.84cm、幅6.31cm、厚み5.14cm、重量625gである。

縄文土器(図11)

13は細江川支流内に堆積した第5a層より出土した深鉢の口縁部片で、内面に緑帯文を有する。14は第5b層から出土した深鉢胴部から口縁部にかけての破片で、外面の下半には縄文が認められる。内面の調整は上半が横方向、下半が縦方向のナデである。13は縄文時代後期、14は後期前半であろう。

(小田木)

弥生土器(図12、図版6)

15は畿内第Ⅴ様式の甕である。口縁端部を上方につまみ上げており、体部は肩が張り平底にいたる。体部外面は右上がりの平行タキで、内面は板状工具でナデ調整している。

円筒埴輪(図12、図版6)

16・17がある。16は5段に復元図化した、4段の可能性もある。口縁端部は上端に面をつくり、最下端部に特に底部調整は見られない。外面左上がりのハケメ調整で内面はナデである。タガは断面台形で低くヨコナデ調整されている。最上段と最下段を除いて円形のスカシ孔がある。17は16とは別個体と思われるもので、最下段のみが残る。外面は板状工具で縦方向にナデ上げている。内面はナデ調整である。タガは低く断面台形を呈する。両者とも窯窯焼成で、川西編年のⅤ期に当る[川西宏幸1978]。

須恵器(図13・14、図版6～8)

18～27は古墳～飛鳥時代の蓋杯である。21の杯蓋は天井部と口縁部の間に明瞭な稜線があり、口縁端部は内傾する面をつくる。MT15型式であろう。杯蓋18・19・20は外面の稜線が消え、口縁端部も丸くおさめており、口径からみて20はTK10型式、18・19はTK209～TK217型式であろう。24～27の杯身は長く立上がる口縁部をもち端部は丸くおさめる。体部外面の下半部以下は逆時計回りの回転ヘラケズリである。TK10型式と思われる。22・23はやや立上がり短くTK43～TK209型式であろう。28・29は有蓋高杯の蓋である。28は上面がわずかに凹むつまみの部分である。29は天井部上半をカキメで仕上げしており、口縁端部内面に1条の凹線を施す。30・31は長脚二段スカシの高杯脚部である。30は外面の上下段を画する凹線があり、上段上半部にカキメが施されている。長方形スカシが三方に穿たれていたと復元できる。31は長方形四方スカシの脚部で、上下段を2条の凹線で画している。柱状部からゆるやかに裾部が開き、裾端部は面をつくり凹線が巡る。

飛鳥～奈良時代の杯類には、杯G蓋32～37、杯G身38～43、杯A44・45、杯B蓋46～51、杯B身52～65がある。杯Gは底部から直線的に伸びる体部をもち、口径は8.2～11.3cmで10cm前後が多い。蓋は口径9.2～11.0cmと大きめのものを含み、内面のかえりも内寄りに付けられている。体部の形状や法量などから飛鳥Ⅱの新相から飛鳥Ⅲとみられるが、杯Hがほとんどないことから飛鳥Ⅲが中心であろう。杯Aのうち44は口径に比して器高がやや大きく、体部外面の最下部に回転ヘラケズリが見られる。平城宮土器Ⅵであろう。杯Bは高台の形状や貼付け位置で3つに分類できる。52～56は高台が

底部から体部にかけての屈曲部からやや内側に外方に踏ん張る高台をもつ。57～61は底部のやや内側に位置するが高台は断面台形で低い。これらは高台の形状は異なるが飛鳥Ⅲ・Ⅳの範疇と考えられる。一方、62～65は断面台形の高台が底部から体部の屈曲部に位置するもので、65は高台が体部と一体化した様相を呈する。平城宮土器ⅤないしⅥとみられる。杯B蓋は内面にかえりをもつ46・47・49と、かえりのない50・51に分類できる。両者ともほぼ同じ形状の宝珠形つまみをもつ。いずれも杯身の前二者の蓋と思われる。

次に杯類以外の須恵器の器種について記述する。66は堤瓶などの口縁部と思われる。口縁端部は玉縁状に丸くおさめる。67は小型の堤瓶である。遺存する体部外面は回転ヘラケズリが残る。外面に灰緑色の釉がかかる。68・69は平瓶である。68は小型であるが、長い口縁部が付く特徴的な器形である。69にはやや広口の口縁部が付く。いずれも体部の最大径部位が稜線をなして屈曲する形状である。70は小型の横瓶である。外面に格子タタキメが残る。口縁部は直線的に伸び上端に面をつくる。71・72・77～80・85は壺である。71は小型の有蓋短頸壺で、下半部は欠損する。体部は最大径で屈曲し稜線をなす。72も小型の壺であろう。上半部が欠損しており形状は不明である。丸底をなし底部付近の外面にヘラにより粗雑に刻線が刻まれている。77・78は同様の器種と思われる。77は上半部で、なで肩の体部から細頸の口頸部が付く器形である。外面に厚く灰白色の自然釉が付着する。78は広い平底をもつなで肩の体部で、口頸部は細くなると推定される。内外面ともにヨコナデ調整されている。79は脚台付きの直口壺である。球形の体部から直線的に口縁部となる。脚台は緩やかに開き、裾部付近で開きがより大きくなる。裾部に円形のスカシ孔がある。体部上半部にはカキメを加えている。口縁端部と脚端部はいずれも丸くおさめる。80は台付長頸壺と思われる。上半部は欠失している。高く踏ん張る台をもつ。体部外面はヨコナデで仕上げているが、平行タタキメが残されている。85は大型の広口壺の口縁部と思われる。あまり開かず立上る口縁部で上端に面をつくる。上端から1cmほど下位の外面に1条の凹線が施されている。凹線からさらに下位にはハケメあるいは櫛描きの文様とも見える不鮮明文様がある。73～76は壺などの蓋である。76は大型の蓋であるが、口縁端部のつくりは杯B蓋に類似している。砂粒の少ない精良な胎土で、天井部は薄くつくられている。81は完形に復元できる高杯形器台である。杯部は外面に2条一組の凹線により2段に区切られ、下段の外面はカキメ調整で仕上げられている。内面には同心円の当て具痕が残される。杯部の口縁端部は外方にかすかにつまみ出すようにして上端が面をなすようになっている。台部は2条一組の凹線で5段に区分され、上4段には外面カキメ調整後にスカシ孔が穿たれている。スカシ孔は上3段が長方形四方スカシが同じ位置に穿たれており、最下位だけが三角形四方スカシでスカシの位置が上3段とずれている。最下段はヨコナデ仕上であり、脚端部は面をなす。82はすり鉢の底部である。粘土円板の底部から斜め外方に直線的に体部が立上る。83・84・86・87は壺の口縁部である。86・87は口縁端部を内上方につまみ出す。87は口縁端部直下の外面に1本の稜線を持ち、その下位に2条の凹線がある。83・84は口縁端部を丸くおさめる。体部外面は平行タタキののち、カキメ調整で仕上げる。内面には同心円の当て具痕が明瞭に残されている。

144は器種不明の破片である(図16)。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る大型の須恵

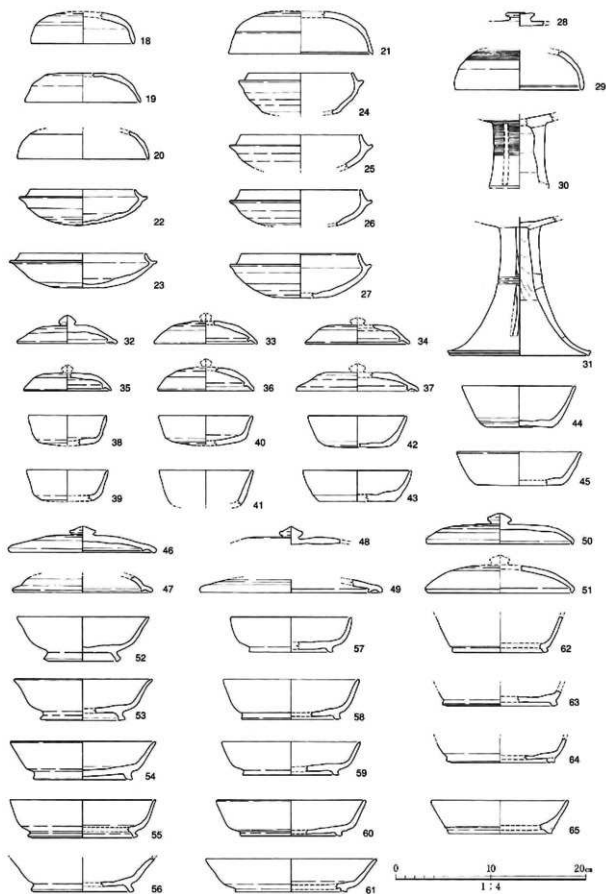


图13 各層出土遺物實測圖(2)

第5b層(18·22·41·42·47)、第5a層(20·62·63)、
第4bii層(19·21·23~26·29~39·43~46·48~61·64·65)、第4bii層(28·40)、第3層(27)

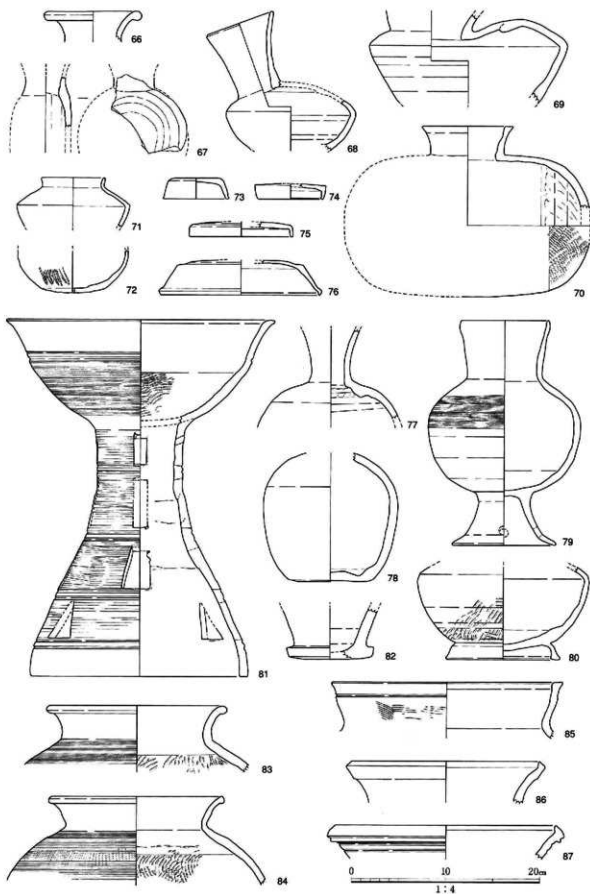


圖14 各層出土遺物實測圖(3)

第5b層(70·72·78·81·86)、第5a層(80·85)、第4biii層(66~69·71·75·77·79·83·84)、第4bii層(74·87)、第4bi層(73)、第4層(76·82)

器で、下端部と判断した部分は断面台形の突帯を貼付け、内外面をていねいにヨコナデしている。小片であるため直径は不明だが50cm程度はありと推定され、上方に向かってすばまる大型の器形である。これに類似する資料として柏原市高井田遺跡[柏原市教育委員会1989]と大阪市細工谷遺跡[大阪市文化財協会1999b]の資料がある。しかし、とりわけ全形が復元できた後者の資料と比較すると、下端部外面が格子タタキを施したのち横方向のヘラケズリであり、内面には同心円当て具痕が残されていない点、底面を鋭い利器で切り取り、薬の痕跡がある点で異なっている。

土師器(図15、図版6)

杯A88・94・96・97、杯H95、皿98・100・102・109、高杯101、碗110・111、壺112、甕113・115、把手116・117がある。

杯Aは平底から体部が立上がり、口縁端部を内側にわずかにつまみ出す形状である。このうち94は直線的に高い体部で、内面に二段の放射状暗文を施す。飛鳥Ⅲであろう。それ以外は90・97の内面に放射状暗文が確認できるほかは、ヘラミガキは認められなかった。平城宮土器V・VIである。皿は98・100は外面をヘラミガキ調整し、内面に放射状暗文を施すものである。101は高杯の杯部と思われる。外面をヘラミガキで仕上げている。飛鳥Ⅳに近いと思われる。

小皿・碗は時期が下るもので、平安～鎌倉時代のものであろう。102は平底から強く外反する体部をもつ皿で、110・111は体部外面をユビオサエで調整し、口縁端部と内面をヨコナデ仕上げする。いずれも平安時代Ⅱ期新段階からⅢ期古段階である。104はコースター形の小皿、105・107の小皿とともに平安時代Ⅲ期からⅣ期新段階であろう。108・109は糸切りの底部片である。

112は二重口縁の壺で布留式新相を呈する。114・115は外面ハケメ調整で仕上げる飛鳥～奈良時代の甕である。113は平安時代Ⅲ期の甕口縁部である。把手116・117は三角形の粘土板で、甕や鍋の体部に挿入され先端を上方向にゆるやかに屈曲させる。

黒色土器(図15)

118・119は断面三角形の小さく低い高台をもつ底部から、浅く直線的に開く体部のA類(内黒)碗である。体部の内外面には密にヘラミガキを施す。120は大きな高台だが高台径が小さいA類碗である。前者は平安時代Ⅱ期、後者は平安時代Ⅲ期古段階である。

瓦器(図15)

小皿121・122、碗123・128、羽釜129がある。小皿は高台のない121と高台のある122がある。両者とも内面にヘラミガキを施す。碗は直径が小さくなった低い高台であるが、内面にはヘラミガキが密に施されており、外面はユビオサエであるがヘラミガキも残る。おおむねⅢ-1期であろう[鈴木秀典1982]。羽釜は外面に2条の凹線を施し端部に面をつくる口縁部の下位に鈐が付く。

移動式竈(図15)

130・131は土師質に焼成された付け底系の移動式竈の底部分である。130は底の下端部を地面へ固定するために、底面から突出させた部分であり、その下端面に直径2mmほどの孔がある。131は下端部と焚き口の一部分が残る。外面は粗いハケメ調整されている。

陶硯(図16、図版9)

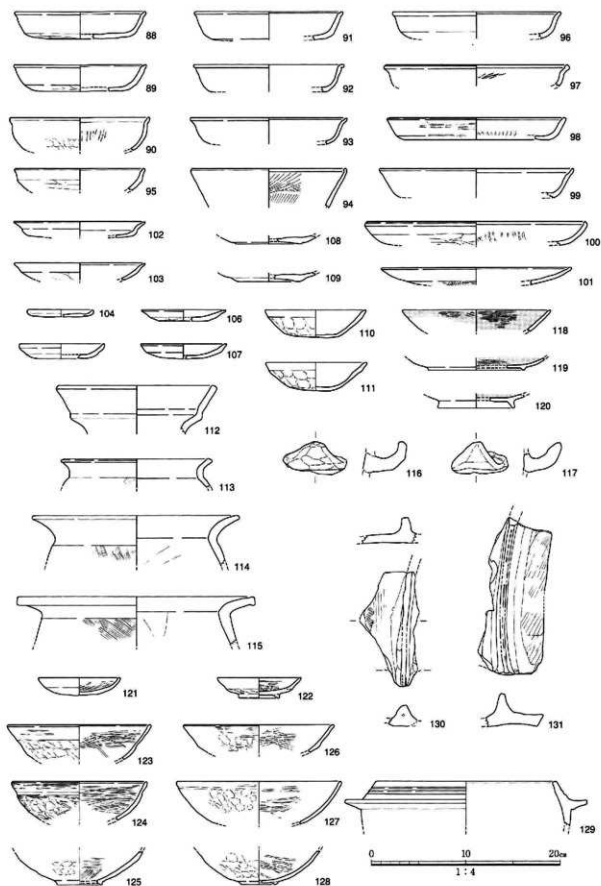


图15 各層出土遺物実測図(4)

第5b層(89・91・92・95・97・101)、第5a層(88・90・96)、
 第4biii層(93・94・98・99・100・103・110~120・127)、第4bii層(105~107・121・124~126・128)、
 第4層(129・131)、第3~4層(102・104・108・109・122・123・130)

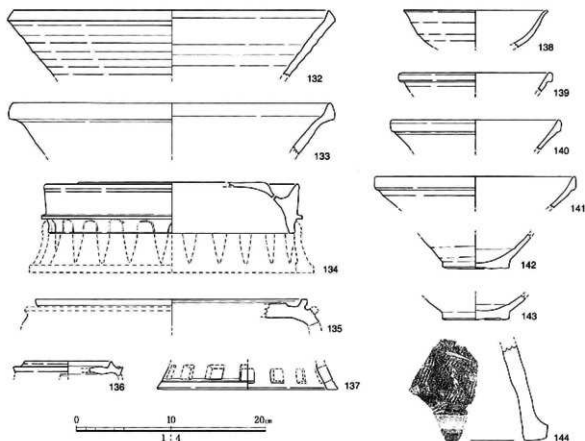


図16 各層出土遺物実測図(5)

第4biii層(138)、第4bii層(133・134・137・140・141・144)、第4層(132・135・139・142・143)、第3～4層(136)

134～137は陶硯である。134は踏脚硯である[奈良国立文化財研究所1983]。陸部の破片は接合できないが、焼成や胎土が類似しているため同一個体と判断した。外面に1本の突線を巡らせ、その下に脚部を接合した痕跡が認められる。他の3点については長方形のスカシ孔を穿つ圈足硯と考えられるが、いずれも細片である。

中世陶器・灰釉陶器・白磁(図16、図版9)

132・133は東播系須恵器の鉢で、両者とも底部を欠く。132は口縁端部を上方につまみ出す形状で、133は口縁端部内面を強くヨコナデし、大きくつまみ出す新相の形状をなす。138は灰釉陶器の碗である。底部を欠く。内外面に薄く灰緑色の釉がかかる。

139～143は白磁碗である。139の口縁端部は丸く玉縁をなすが、140・141は端部外面に面をつくる。底部143は高台を削り出す。142・143ともに内面の見込み部分に沈線がある。いずれも横田・森田分類のⅣ類である[横田・森田1978]。

土鍾(図17、図版10)

久保分類でいうⅡ類の棒状土鍾145～150、Ⅰ類の管状土鍾151～171がある[久保和士1992]。多くは土師質で、Ⅰ類の中には瓦質のものもある。棒状土鍾はすべて両端に円孔をもつと思われるが、145・149・150は端面に溝をもつⅡbないしⅡc類である。両端が残る149はⅡb類で、両端の2孔の穿孔方向は振れの関係にあり、2孔をつなぐ1条の線刻が片面のみにある。管状土鍾は小型と大型があ

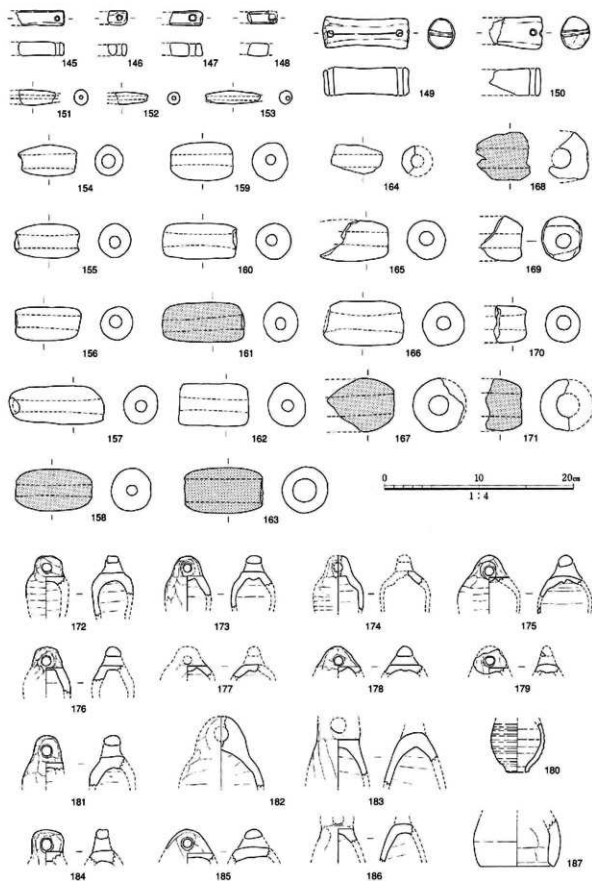


図17 土鍾・イイゴ壺実測図(網掛けは瓦質を示す)

土鍾は表4参照、第5層(174)、第4biii層(172・180・185)、第4bii層(177・183・186)、
第4層(175・178・182・184)、第3～4層(173・176・179・181・187)

表4 土鍾計測表

	No	遺存状態	長さ (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	焼成	出土層位
棒状土鍾 (Ⅱ類)	145	一端欠90%	(5.15)	1.65	0.40	(16.61)	土師質	不明
	146	一端欠20%	(2.00)	1.50	0.50	(3.97)	土師質	第4bii層
	147	一端欠50%	(3.55)	1.55	0.60	(6.44)	土師質	第4biii層
	148	一端欠40%	(3.10)	1.30	(0.60)	(4.98)	土師質	第4biii層
	149	完形	9.10	3.30	0.55	107.25	土師質	第4biii層
	150	一端欠40%	(5.55)	3.40	0.50	(56.38)	土師質	第3～4層
	151	両端欠60%	(3.85)	1.65	0.35	(9.88)	土師質	第4biii層
	152	一端欠70%	(3.45)	1.35	0.35	(5.50)	土師質	第3層
	153	一端欠90%	(5.80)	1.35	0.40	(9.96)	土師質	不明
	154	完形	6.20	3.30	1.40	51.62	土師質	第4層
管状土鍾 (Ⅰ類)	155	完形	6.90	3.60	1.20	76.51	土師質	第4biii層
	156	完形	7.00	3.55	1.30	87.37	土師質	第5b層
	157	完形	10.10	4.10	1.15	144.11	土師質	第4biii層
	158	完形	8.05	4.45	1.10	146.78	瓦質	第4bii層
	159	完形	6.70	4.20	1.05	103.32	土師質	第4biii層
	160	完形	7.90	3.75	1.15	123.86	土師質	第4biii層
	161	完形	8.75	4.20	1.10	150.85	瓦質	第4biii層
	162	完形	7.45	4.60	1.20	163.11	土師質	第4biii層
	163	完形	8.40	4.85	2.50	158.53	瓦質	第3層
	164	両端欠70%	(5.50)	(3.10)	(1.30)	(21.55)	土師質	第4bii層
	165	一端欠60%	(7.20)	4.30	1.45	(82.01)	土師質	不明
	166	完形	8.50	4.70	1.45	169.65	土師質	第5b層
	167	一端欠70%	(7.10)	5.70	2.05	(134.27)	瓦質	第4層
	168	両端欠50%	(5.75)	(5.10)	(2.00)	(70.68)	瓦質	第4bii層
	169	一端欠30%	(4.40)	(4.70)	1.45	(60.46)	土師質	第4biii層
	170	一端欠20%	(3.45)	3.90	1.40	(44.94)	土師質	第4biii層
	171	一端欠20%	(3.30)	(5.45)	(2.40)	(46.49)	瓦質	第4層
	238	完形	7.80	3.95	1.20	118.14	土師質	SX401
	239	完形	3.00	0.80	0.25	1.45	土師質	SK401
	240	一端欠90%	(2.20)	1.00	0.30	(2.05)	土師質	SD403

る。各法量は表4に示した。

イイダコ壺(図17、図版10)

いずれも釣鐘形で須恵質の172～180と土師質の181～187がある。須恵質の資料は体部外面をヨコナデする。須恵質と土師質の形状における差異はあまり認められない。当遺跡から1km南の山之内遺跡では大半が土師質であるのに対して、今回の出土資料は須恵質と土師質が相半ばしている。6・7世紀代で在地産と考えられる山之内遺跡とのこの差異は、時期差か地域差か検討を要する。

(京嶋覚)

瓦(図18、図版11)

重弧文軒平瓦195は二重弧文で、桶巻き作りの桶を回転させて施文した可能性がある。凹面に布目痕、凸面に粗い条線タタキ痕が見られる。胎土は精緻、焼成は土師質である。188～191は丸瓦である。188は凹面に細い布目痕が見え、側面の調整はいいである。胎土は石英・長石の細粒を含むが精緻で、須恵質に焼上っている。189は凹面に布目痕と紐痕跡があり、側面の調整はいいである。

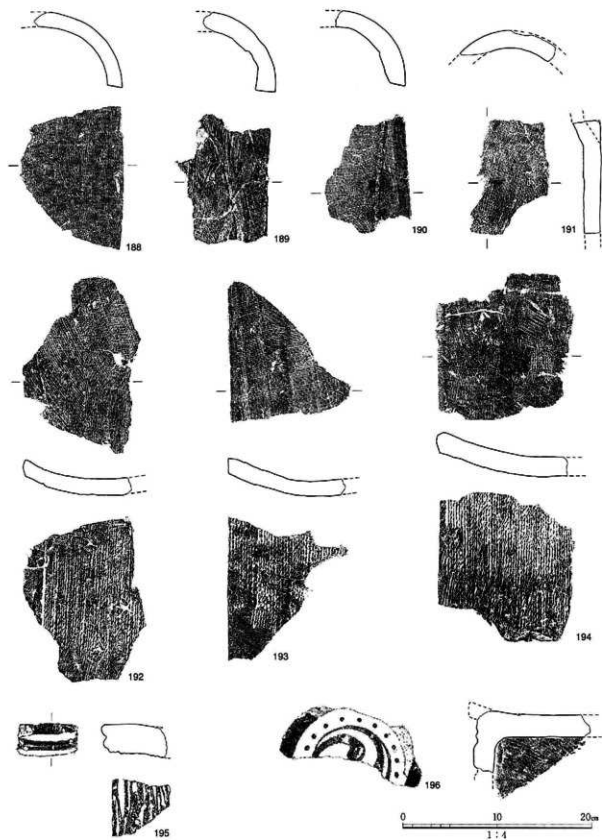


图18 瓦房测图

第0层(196)、第3层(194)、第4bi层(195)、第4bii层(190~193)、第4biii层(188~189)

る。胎土は赤色クサリ礫を含むが精緻で、焼成は土師質である。190は凹面に布目痕と紐痕跡が見え、側面の調整はていねいで、凹面側縁部に面取りを施す。胎土は精緻で、土師質に焼上っている。191は玉縁部際の破片で、粘土板を屈曲させて玉縁部を成形し、玉縁部際の凸面に粘土を補充して丸瓦部の肩を成形している。胎土に赤色クサリ礫を含み、土師質に焼成している。192～194は平瓦である。192は凸面に縄目タタキ痕、凹面に布袋の縦じ目をもつ布目痕が見える。側面はていねいに面取りを加え、しのぎ状になっている。胎土は石英・長石粒を多く含みやや粗雑で、須恵質に焼成されている。193は凸面に縄目タタキ痕、凹面に布目痕と模骨痕が見え、側面と凹面側縁部に面取りを施している。胎土は石英・長石粒を含みやや粗雑で、焼成は須恵質である。194は凸面に縄目タタキ痕、凹面に布目痕が見える。凹面側縁部に深い面取りを施し、多面体を呈している。胎土は精緻で、焼成は土師質である。196は三巴文軒丸瓦Aである。Aは左巻きで巴尾は半周以上し、次の巴胴に接する。珠文は小粒で、復元すると20個になる。丸瓦凹面にはコビキBと粗い布目痕が見られる。チャート・灰色クサリ礫粒を多く含み、瓦質に焼上っている。

(黒田慶一)

銅製鈴(図19、図版9)

197は第4b層から出土した銅製の鈴である。鈕は環状で鈴中央に1条の凹線が巡る。一文字の開口部の両端がやや広くなる。同様の形状の鈴は古代の遺跡からも出土しているが、いずれも銅板を半球形に加工して上下組合せ、鈕は軸を挿入して内側でかしめて付けている。しかし、本資料は全体が一体で鑄造されていることがX線透過写真で確認されている。内部の鳴子は鉄製と思われる。出土層位からみて平安時代後期以前のもと思われる。

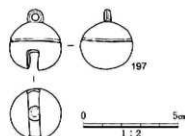


図19 銅製鈴実測図

銭貨(図版9、表5)

古代～近世の銭貨が合計6枚出土している。これらの出土層位・年代等は表5に示す。

(京嶋)

表5 銭貨計測表

番号	出土層位	名称	初鋳年代	外縁 径(mm)	内径 径(mm)	備考
198	第5a層	和同開珎	708	24.2	6.2	皇朝十二銭
199	第4biii層	萬年通宝	760	25.1	6.5	皇朝十二銭
200	第4biii層	貞観永宝	870	19.5	5.0	皇朝十二銭
201	第4biii層	貞観永宝	870	19.5	5.0	皇朝十二銭
202	第5b層	延喜通宝	907	17.8	5.4	皇朝十二銭
203	第4層	嘉祐元宝	1056	23.9	7.6	北宋銭

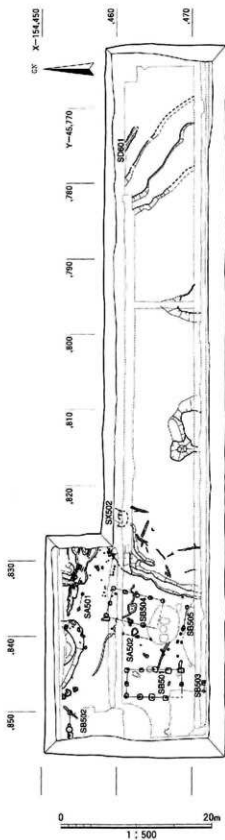


図20 古代以前の遺構平面図

第3節 遺構と遺物

1) 古代以前の遺構(図20～26、図版1～4)

調査区の東半部では第6層の上面で細江川の支流とみられる流路が認められ、この東では東西方向の溝SD601が確認された。

細江川支流は調査区南で幅約65m、北では50mとなる。深さは最大でも0.9mである。流路内に堆積した河成層に見られるラミナの方角と河底に残された削痕および地形の状況から、南西から北東へ向う流れと南東から北西へ向う流れが、調査区内で合流しているものと考えられた。また、堆積物の状況から、常時ではなく大雨や台風の時などに大量の水が流れたものと推測される。流路内では多数の流木が認められ、後背地には林あるいは森の存在が想定された。これらからサンプルを採取し、樹種同定等各種の自然科学分析作業を行った。この結果については第Ⅲ章で述べる。流路上層に認められた作土層の第4b層からは古代～中世の遺物が出土し、下層の第5層からは縄文時代から古代にわたる遺物が出土している。この流路の中では、弥生時代と考えられる性格不明の落込みSX502が認められた。規模は東西2.1m、南北0.5m以上、深さ0.6mで埋土は下部がラミナの目立つ灰色中粒砂～砂礫、上部は黒褐色細粒砂質シルト～シルトである。弥生土器が出土した。SD601は東端で長さ4m分を検出した南西から北東方向の溝で、出土遺物はない。

第5層上面では細江川支流の西で、古代の掘立柱建物SB501～505と多数の柱穴、櫓SA501・502、溝SD501～504、落込みSX501が認められた。これらの建物群は主軸方位の違いで、正東西・南北方向のSB501～503と、北東方向のSB504・505・SA501・502との2群に分けられる。柱穴や周辺遺構の出土遺物から、これらの建物や櫓は飛鳥時代後半から奈良時代末葉ないしは平安時代初頭のものとみられ、建物方位

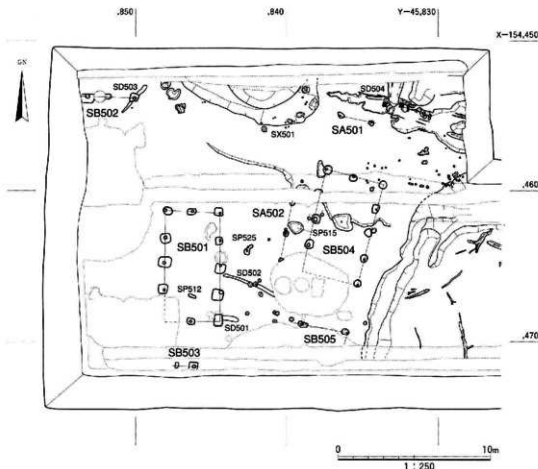


図21 古代の遺構分布図

の違いは時期差として捉えることが可能と考えられる。出土遺物や発掘調査段階での検討結果からは北東方向の建物群がやや新しいと思われた。ただし建物間には直接の切合い関係が無く、詳細な時期差については断定しえなかった。以下でこれらの建物について略述したい。

SB501は桁行4間×梁行2間の南北棟で、方位はN0°Eとほぼ正南北である。規模は南北7.2m、東西3.6m、床面積は25.9㎡である。柱間寸法は桁行で1.65～1.80m、梁行で1.75～1.85mである。柱掘形の平面形は正方形あるいは東西に長い隅丸方形が多く、一辺は0.4～0.8mである。柱掘形の埋土は第7層の偽磔を含む灰～灰黄色砂質シルトであった。柱痕跡の直径は0.10～0.15mで、SP503では柱材が残っていた。掘形からは図31に示したものをはじめ飛鳥Ⅲ・Ⅳに比定される遺物が出土した。この北西の調査区隔で検出したSB502は、柱穴3基を確認したにすぎないが、埋土の状況と柱痕跡が明瞭であることから、棟方向は不明であるが北東方向に延びる建物と考えた。方位はSB501と同じく正方位である。また、SB501の南では正東西方向にならぶ柱穴2基を検出し、SB503とした。掘形の形状や埋土の状況等からこれもSB501と同様の建物で、南へ延びるものと考えた。

SB504は前記の建物群の東に接するようにして検出された。桁行4間×梁行2間の南北棟で、方位はN14°Eである。規模は南北6.8m、東西3.9m、床面積は26.5㎡である。柱掘形の平面形は直径0.3～0.5mの円形や楕円形で、埋土は第7層の偽磔を含む黒～暗褐色砂質シルトであった。柱痕跡と思われる部分の埋土は黒～暗褐色のシルトで、中には柱材が残るものも存在した。桁行の柱間寸法は

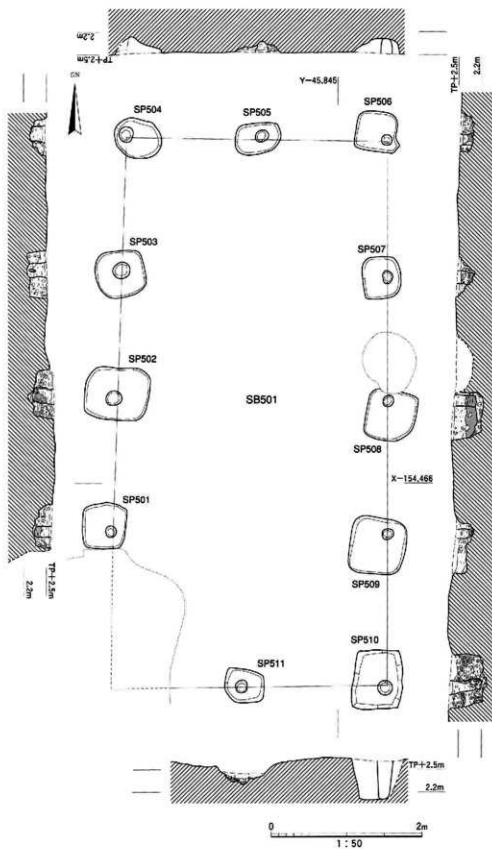


図22 SB501平・断面図

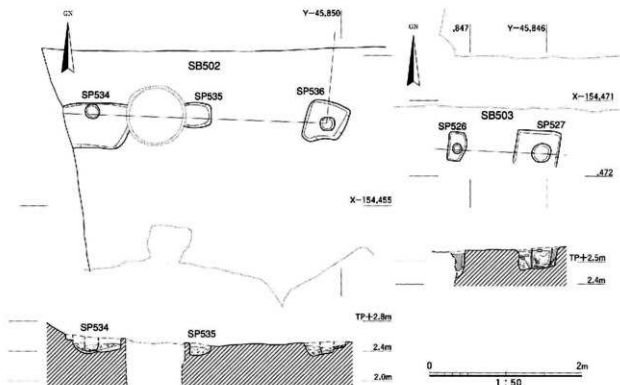


図23 SB502・SB503平・断面図

1.65～2.15mでSB501と比較するとややばらつきがある。北西隅の柱穴SP539に切られるSP538からは、飛鳥Ⅲ・Ⅳに属する須恵器が出土していることから、これをSB504の上限とみることができよう。このほかの柱穴からは須恵器・土師器の細片のほかに、布目が残る瓦片が出土している。この南で検出したSB505は柱穴2基を確認したにすぎないが、埋土の状況や方位等から建物と考えた。SA501はSB504の北に位置し、東西方向に並ぶ2基の柱穴を検出した。また、SB504の西では南北方向のSA502が認められた。それぞれの方位はN78°W、N12°Eである。方位がSB504と類似していることから、検出した柱穴の数は少ないがこの建物に伴う構と推定した。なお、SA501・502の柱掘形の埋土は、ともに第7層の偽礫を含む灰黄色シルト混り中～粗粒砂で、これらの建物や構のうち、SB504に伴うSP540・SP523と、SA501に伴うSP543では柱材が良好な状態で残存していたため、サンプルを採取し、樹種同定と年代測定を行った。この結果については第三章で述べる。

以上の建物群の周辺では溝SD501～504、落込みSX501が認められた。SD501・502はSB501の東で確認された幅の狭い東西方向の溝で、SD501はSB501の柱穴に切られる。埋土からは須恵器・土師器の細片が出土しているが、時期を特定できるものはなかった。SD503は調査区北西にあり、SB502の柱穴に切られる。SD504はSB502の北東で検出された東西方向の溝で、西側が浅くなり途切れる。深さは0.2m未満で、埋土からは飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器が出土した(図31)。SX501は北端で確認された東西9.0m、南北2.5m、深さ0.8mの不整形な落込みで、埋土の状況からみて倒木痕の可能性もある。出土遺物は古墳～奈良時代の須恵器・土師器である(図31)。

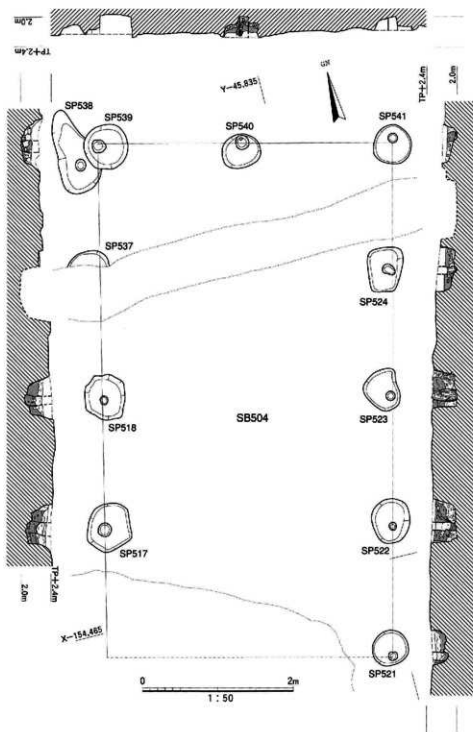


図24 SB504平・断面図

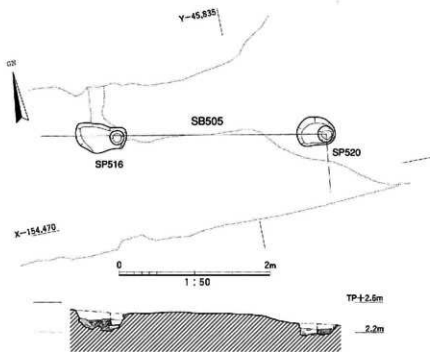


图25 SB505平·断面图

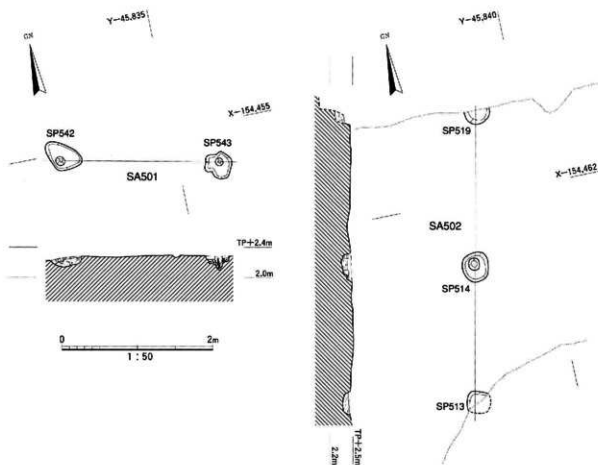


图26 SA501·502平·断面图

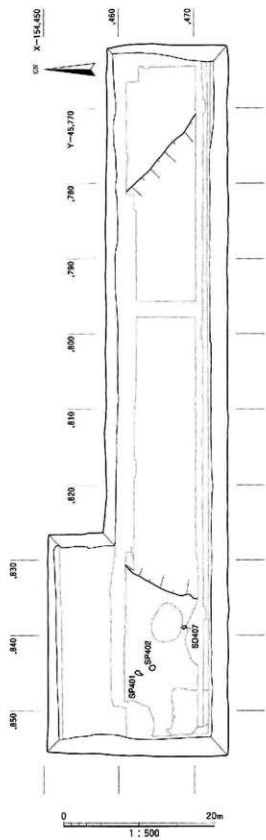


図27 中世の遺構平面図
(第4c層上面検出遺構)

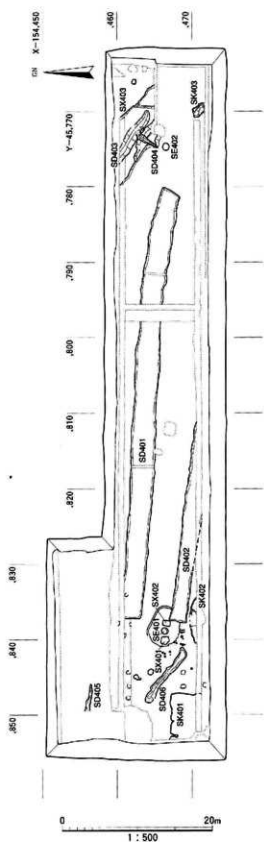


図28 近世の遺構平面図
(第3層下面・第4a層上面検出遺構)



写真3 SE401(北西から)

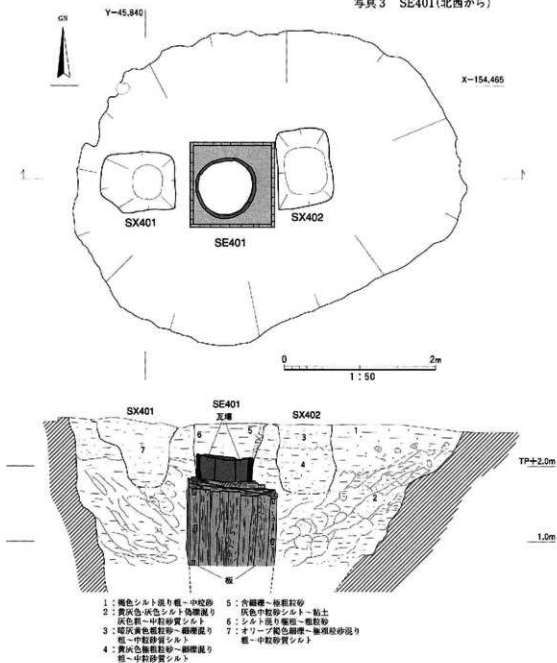


図29 SE401平・断面図

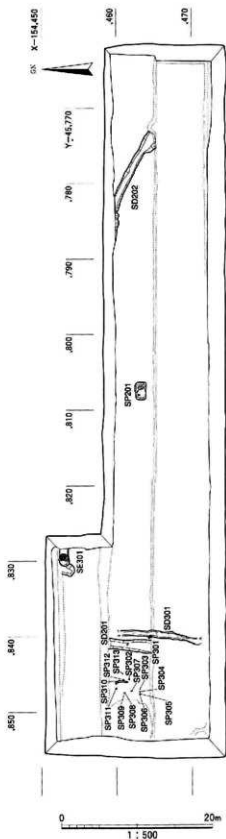


図30 近世以降の遺構平面図
(第2・3層上面検出遺構)

2) 中世以降の遺構(図27～30、図版1・4、写真3)

中世の遺構としては、第4c層の上面で溝SD407と埋土に瓦器を含むピット2基SP401・402を検出した。なお、先に述べた細江川支流については、第4bii層が中世に属する作土層であることから、中世以前には埋没していたものとみられる。また、第4層の上面では、近世の溝や土壌・ピットと井戸が認められた。これらの多くは耕作に伴うものであろう。なお、遺構の年代は江戸時代であるが、多くが下位層の遺物を含んでいるため、出土遺物にはかなりの時期幅がある。

SE401は調査区西で確認された。掘形は東西5.1m、南北4.1mの楕円形である。井戸側はまず、板材を一辺1.2mの正方形に組合せた上に、瓦導を直径0.8mの円形に一段積んでつくられている(写真3)。深さは1.9mまで確認したが完掘しえなかった。井戸側の東西には性格不明のSX401・402がある。両者はいずれも平面形は0.7m×1.0mの隅丸長方形で、深さは0.9mである。SE401の両わきに掘形を切って配置されていることから、はねつるべの支柱穴の可能性がある。SE401からは一重網目文を有する17世紀後半の肥前磁器碗のほか、瓦器碗、土師器羽釜が、SX401からは土錘が出土した。また、東ではSE402が認められた。

SD401・402は、調査区の中央で南北に並んで検出された東西方向の耕作溝である。SD401は両端が調査区内で確認され、SD402の西は調査区の北西で認められた。幅は2.0～3.0m、深さ0.1mで、埋土は粗・中粒砂を含む黄灰色シルトである。SD401からは瓦器皿・白磁碗が、SD402からは青磁碗が出土した。SD403は調査区の東で認められた北西～南東方向の溝で、細江川支流の方向に一致し地形を意識して掘削されていた。溝の幅は1.0m、深さ0.5mで、少なくとも一度は掘削し直されている。また、この溝はSX403とした落込みとも方向が同じであることから、この個所に何度

も同一方向の溝が掘削された可能性が高い。SD403からは17世紀前半の土師器皿と唐津焼碗のほか土鍾が出土している。SD404はSD403に取付く南西～北東方向の溝である。SD405およびSD406は北西から西で認められた南東～北西方向の耕作溝である。

このほかに検出された遺構としては、土壇SK401～403がある。これらのうちSK401はその形状から土取り穴と思われる。SK401からは須恵器すり鉢、土鍾などが出土している。SK403は倒木の痕跡である。

また、江戸時代の陶磁器を含む第3層上面では、調査区の西で南北方向の溝SD301と、この西でビットSP301～313を検出した。これらのビットは建物等に伴うものではない。この北側では17世紀後半以降の瓦葺と板材を組合わせて井戸側を作ったSE301が認められた。これらの遺構からは陶磁器等が出土している。

近世～近代の遺物を含む第2層の上面では南北方向の溝SD201、東西方向の溝SD202とビットSP201が認められた。これらの遺構は近代のものと思われる。

(小田木)

3) 遺構出土の遺物 (図31、図版6・10)

SX502 204・205は、広い平底から外方に体部が伸び、胴が張る器形であると想定され、弥生土器広口壺の底部と思われる。204は外面に黒斑があり、内面はユビナデ調整である。205は内外面にヘラミガキ調整を施している。器形や調整技法とともに胎土に粗い砂粒が多く含まれるなど畿内第Ⅰ様式の特徴を示している。

SX501 206は土師器杯Cで口径13.8cmに復元される。口縁端部は内傾する面をつくる。外面は底部をヘラケズリ、それ以上はヘラミガキを施し、口縁部と内面はヨコナデである。飛鳥Ⅱであろう。208は土師器杯Aで口径14.6cm、器高3.3cmである。口縁端部を内側に肥厚させる。外面底部はヘラケズリを施し、それ以外はナデ調整である。内面に放射状暗文を施す。209は土師器皿と思われ、口縁端部は内側に肥厚させる。小片であるため口径は復元できないが、20cmとして図化した。外底面はヘラケズリ、それ以外はヨコナデ調整である。208・209は平城宮土器Ⅰであろう。210は土師器高杯の柱状部である。長い柱状部からゆるやかに裾部が広がると推定される。206・208・209と異なり胎土はやや粗い。難波宮跡周辺で出土するいわゆる「難波型」の土師器[京嶋覚1989]に類似し、6世紀後葉の在土器であろう。212・213は土師器甕の口縁部付近で、212は口縁部が短く端部を丸くおさめるのに対して、213は口縁部は長く端部は上方にわずかにつまみ上げ面をつくる。体部の外面調整はいずれもハケメ調整であるが、内面は212がハケメ調整後にユビナデ、213は横方向の板ナデである。212は6世紀代、213は奈良時代のものであろう。211は土師器の把手である。三角形の板状で先端を上方にゆるやかに屈曲させている。甕か鍋の把手であろう。

須恵器の219・217は杯B壺である。219は、内面の端部から1cmほどの位置にかえりがある。口径14cmに復元できる。217はかえりがなく、口径16.6cm、天井部の高さは2.5cm程度に復元できる。220・223・226は須恵器杯Bの底部である。底径は各々7.0cm、12.3cm、15.2cmである。220は小さくやや低い高台であるが、底部の、体部との屈曲部からやや離れた位置に貼付けられている。223・226

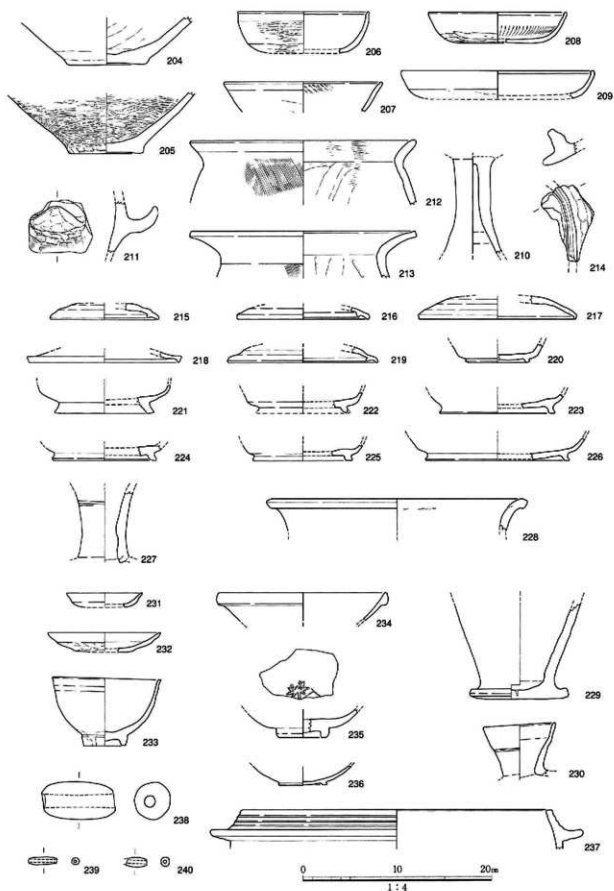


图31 澄城出土文物实测图

SX502(204·205)、SX501(206·208~214·217·219·220·223·226·227)、SB501(207·221)、SP538(224·216)、SD504(215·218·222·225·228)、SD401(231·234)、SD402(235)、SD403(232·233·240)、SD406(230)、SK401(229·239)、SE401(236·237)、SX401(238)

の高台はいずれも高く、外方に踏ん張る形状である。底部外面は回転ヘラケズリ、それ以外はヨコナデである。227は須恵器長頸壺の頸部である。外面に1条の凹線が巡る。これらの須恵器は飛鳥Ⅲから平城宮土器Ⅰの時期にかけてのものであろう。

214は土師質に焼成された付け庇の移動式甕である。焚口をなす端面がわずかに残り、内面には煤が付着している。

SD504 215は須恵器杯G蓋である。口径11.4cmで、内面の口縁端部から1cmの位置にかえりがある。天井部には自然軸がかかる。218は須恵器杯B蓋の口縁端部で、口径15.7cmに復元できる。222・225は須恵器杯B底部で、体部との屈曲部から中心よりの底部に高台がある。228は須恵器甕口縁部である。端部は丸みをもちながらも上下がヨコナデされて、かすかに面をなしている。これらの須恵器はSX501と同時期と思われるが、218はやや時期が下る。

SB501 SP508から207・221が出土した。207は土師器杯Aで、口径は16.7cmに復元できる。底部を欠くが、底部から直線的に伸びる体部である。口縁端部はわずかにつまみ上げる意識が認められる。内面上半には斜行する放射状暗文が、下半には正放射状暗文が施される。221は高く大きな高台をもつ底径10.6cmの須恵器底部片である。壺などの底部の可能性もあるが、内面がいていないヨコナデ調整であることや底部から立上る体部の器壁が薄くつくられていることから、初期の杯Bである可能性が考えられる。

SP538 224・216が出土した。224は底径11cmの須恵器杯B底部である。外方に大きく踏ん張る高台をもつ。216は口径14cmに復元できる須恵器杯B蓋である。口縁端部はわずかに下方につまみ出し、外面に面をつくる。内面の端部から1cmの位置にかえりをもつ。

以上の掘立柱建物の柱穴から出土した土器は飛鳥Ⅲ・Ⅳに位置づけられ、掘立柱建物の時期の上限を示すものと思われる。

SD401 瓦器皿231、白磁碗234を図示した。231は口径8cmほどの小皿で、外面をナデ調整、口縁部と内面をヨコナデで仕上げる。234は大きな玉縁の白磁碗口縁部で、横田・森田分類のⅣ類であろう[横田賢次郎・森田勉1978]。

SD402 龍泉窯系の青磁碗235が出土している。横田・森田分類のⅠ類であろう。内底見込に花文のスタンプがある。

SD403 土師器皿232、唐津焼丸碗233、小型の管状土鍾240が出土している。232は浅い土師器の皿で、外面をユビオサエで仕上げる。233は緑白色の釉を内外面にかけている。240は[久保和士1992]でいうⅠ類の土鍾で、長さ2.20cm以上、直径1.00cm、孔径0.30cm、重量2.05gである。遺構の時期は、232・233から17世紀前半ころであろう。

SD406 230は須恵器平瓶の口縁部である。外面の中部に1条の凹線を巡らせている。

SK401 須恵器すり鉢229は全体的に表面が磨滅している。内底面の中央に櫛状のものによる刺突が1箇所ある。239は小型管状土鍾(Ⅰ類)で長さ3.00cm以上、直径0.80cm、孔径0.25cm、重量1.45gである。

SE401 瓦器碗236は口縁部を欠くが、底径5.1cmの低い高台が貼付けられる。全体に器面が風化し

ており、調整は明瞭でない。237は瓦器羽釜である。口縁部上端から2.5cm下方に2.2cmほど突出する鈎が貼付けられている。口縁部外面は3段に強くヨコナデ調整されており、上端は面をつくる。鈎から下方の外面には煤が付着している。鈴木編年のⅣ-1・2期であろう[鈴木秀典1982]。

SX401 238は大型の管状土鍾(Ⅰ類)で、長さ7.80cm、直径3.95cm、孔径1.20cm、重量118.14gである。

(京嶋)

第Ⅲ章 調査成果の検討

第1節 南住吉遺跡の基本層序の再検討

南住吉遺跡の基本層序は、[櫻井久之1998]、[小倉徹也2002]によって報告されている。ここではMN02-6次調査で得られた新たな所見について述べた上で、層序について検討を加えることにする。なお、遺跡周辺の旧地形および各調査地における柱状図の位置を図32に、柱状対比図を図33に示す。なお、図33に示した大阪市立自然史博物館(ND98-21次)は、㊸地点(図32)から東北東約400mに位置している。

第Ⅱ章第2節でも記述したが、本調査地の層序は沖積層に相当する第0層から第5層、低位段丘構成層の第6層、中位段丘構成層の第7層から第9層に区分された。第9層では巣穴の化石は確認できなかったが、塊状で淘汰が非常に良い岩相を示し、平行ラミナやレンズ状のシルトの偽礫が含まれる

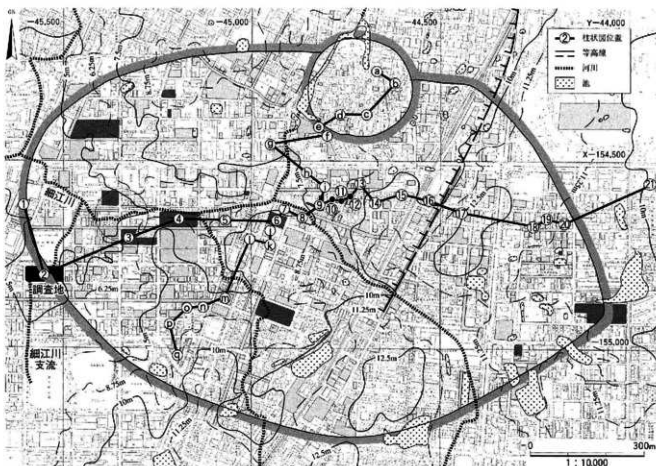
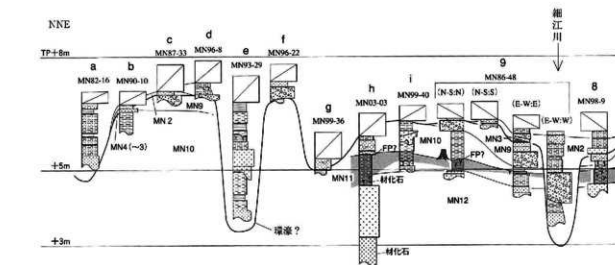
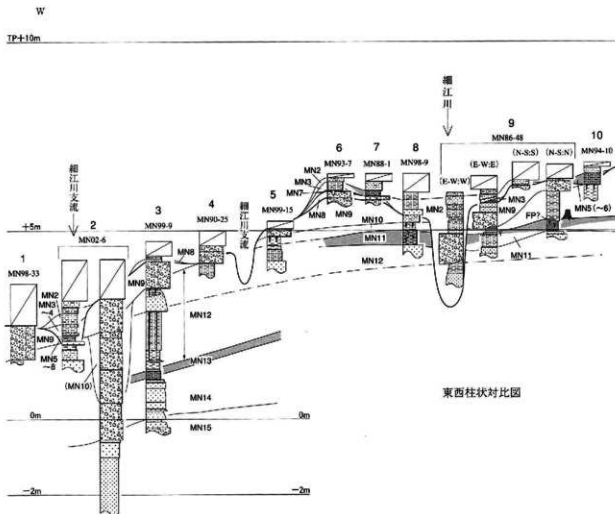


図32 遺跡周辺の旧地形と柱状図の位置 ([大阪市文化財協会2002]に加筆)

大阪市地形図[大阪市総合計画局1984]に加筆(等高線および河川は1万分の1地形図(陸地測量部1920年測図)を基に作図)

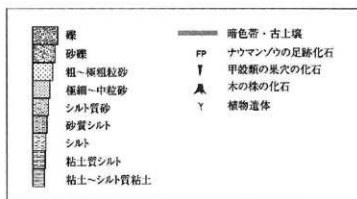
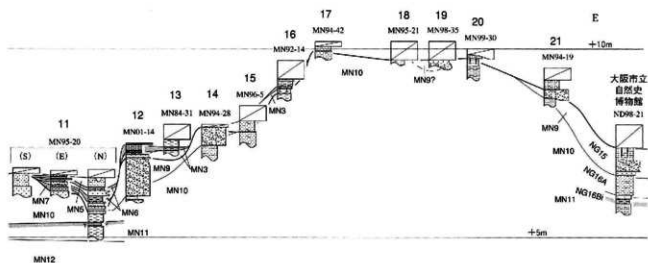
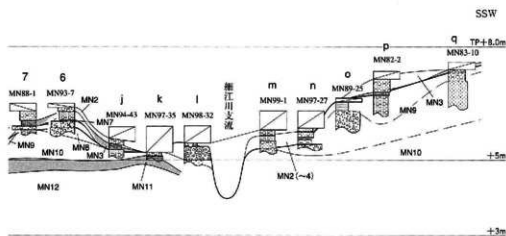


南北柱状対比図



東西柱状対比図

図33 南住吉遺跡の柱状対比図 ([大阪市文化財協会2002]に加筆)



こと、および周辺のこれまでの地質状況から南住吉15層に対比される海成層と考えられる。調査地内で行われたボーリング調査ではTP-3.2m～-4.3m間で貝殻片が、TP-5.1m～-6.2m間でサンドパイプが確認されている。第8ai層は暗色化していることから南住吉13層に、第8aii～bii層は細粒砂～砂礫からなる河成層で、全体として上方細粒化し、植物の根の痕跡が観察されるといった特徴から南住吉14層にそれぞれ対比されると考えられる。MN99-9次調査[大阪市文化財協会2002]の層相の特徴と違う点もあり、今後さらにデータを蓄積する必要がある。第7i～iii層は主として黄灰色の粘土・シルト～砂礫からなる河成層で、全体として上方細粒化し、上面に乾痕が目立つといった特徴から南住吉12層に対比される。第7o層は下位の第7i～iii層を大きく削り込む砂礫を主体とする河道堆積層で、これまでの調査では確認されていない層準である。本層中には、堆積構造を残した砂層や暗色帯などのいくつかの小さなブロックが集合して形成された幅3.0m、高さ1.0mのブロックが包含されていた。個々の小ブロックには下位の南住吉13・14層の特徴に類似しているものがあることから、第7i層堆積後に削剥され運搬されたものと考えられ、第7i層堆積後から第7o層堆積期までは時間間隙があったと推測される。また、上位の第6層中に含まれる礫は和泉砂岩やチャートであるのに対して、本層中には泉南流紋岩類の礫が目立ち、第7o層は第6層によって削剥されていた。以上のことから、上面に乾痕が見られ、上部は風化による粘土化が進むといった南住吉10層の特徴とは一致しない点もあるが、ここでは南住吉10層に対比させておくことにする。第6層はトラフ型斜交層理の発達する河成の砂礫層で、第6i層がにぶい黄橙色ないし黄褐色の中礫～中粒砂、第6ii層がクサリ礫様の風化した礫を含む黄褐色ないし明褐色の細礫～粗粒砂からなる。南住吉9層に対比されるMN99-9次調査の第3層はトラフ型斜交層理の発達する暗灰色ないし褐色の中礫～中粒砂からなる砂礫層であり、第6i層の岩相に酷似することから南住吉9層に対比されると考えられる。第6ii層に見られたクサリ礫は、これまでに他地点で認められていない。これらは南住吉9層の新たな岩相の特徴と捉えることができるが、今後さらにデータを蓄積する必要がある。第5層は細江川支流の河川充填堆積物で、後期旧石器時代以降、奈良時代末から平安時代初頭と考えられる遺物もわずかに含まれている。古墳時代から奈良時代の遺物量に比べるとわずかであり、南住吉5～8層に対比させておくことにする。第4層は作土層で、平安時代から室町時代までの遺物を包含することから、南住吉3～4層に対比されると考えられる。第3層は近世の作土層、第2層は近代の作土層、第1層は現代の作土層であり、第3層は南住吉2層に、第2～1層は南住吉1層に対比される。

今回、部分的な坪掘りを含めた原地表下約7m(TP-2.5m)までの地層観察を行ったことによって、基本層序に新たな検討を加えることができた。しかし、本遺跡は上町台地上に立地しており、現代の攪乱の影響を受けやすく地層の残存状態が非常に悪いと、発掘調査での観察事例が少なく、基本層序の確立は未だ不十分で、今後さらにデータを蓄積する必要がある。また、今回、調査地内に細江川支流が見つかったことにより、河川堆積層を細かく観察することができた。上町台地形成後、第8層以上の層準での層序区分には細江川本流などの地層が厚く堆積する場所、河川流路内での発掘調査のデータが重要な鍵となる。

(小倉)

第2節 自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

1) はじめに

今回の南住吉遺跡の発掘調査では、上町台地を構成する低位～中段丘層を開析する細江川の支流と判断される旧流路跡が確認されている。この細江川支流は、出土遺物の相対年代から、中世以前に埋没したことが推定されている。また、河床に形成されている砂礫堆では、当時生育していたと推定される樹木の痕跡(埋没林)が確認されており、同時期の流路充填堆積物からは直径30～50cm程度の流木が出土している(図版1・2)。

細江川支流の集水域は狭く、河床付近で確認された植物遺体は当時の細江川支流近辺の古植生を強く反映しているものと考えられた。そこで、今回の分析調査では、細江川支流の充填堆積物(第5層)について、古植物学的調査を実施し、古植生について検討を行う。この際、植物遺体の複数の部位、すなわち、花粉化石、種子・果実・葉等の大型植物遺体、木材遺体に関する検討を行い、総合的な植物遺体群集の情報を得ることにする。また、古代の建物跡や櫓の柱材(図版3)の樹種について検討し、当時の年代観に関する情報を得ることを目的として放射性炭素年代測定を実施する。

2) 調査地点の層序概要および試料

調査地点の堆積層は、第0～9層に区分されている。このうち、第9～6層が上町台地を構成する低位・中段丘構成堆積物、第5層が細江川支流を充填する堆積物、第4～0層が「中世～現代の堆積物」に相当する。ここでは、発掘調査時の所見に基づいて、調査層準である細江川支流の充填堆積物である第5層およびこれを母材とした作土層である第4層について記載を行う。

第4層は、第4a～4c層に細分されており、さらに第4b層は調査区中央部の支流の河床付近において第4bi～4biii層に細分されている。第4a層は細礫～極粗粒砂を含む暗灰色粗粒～中粒砂質シルトからなり、層相から耕作土と考えられている。第4b層は主に細礫～極粗粒砂を含む砂質シルトからなり、最下部では第5a層の偽礫が混入している。第4c層は灰黄色シルト～中粒砂・細礫混り粗～極粗粒砂からなる。

第5層は、第5a・5b層に区分される。第5a層は黒色シルト質細～中粒砂から細粒砂質シルトからなる。第5b層は暗褐・黒灰色を呈する中粒砂～中礫からなり、シルトや第7層の偽礫、さらに、直径30～50cm程度の流木が出土している。これら第5層は、層相および出土遺物の相対年代から、古代以前に形成された河成層と考えられている。また、第5b層に相当する砂堆上面では埋没林と考えられる、直径5～10cm程度の樹木根痕が高密度に分布している。樹木根痕の内部には遺存状態不良の木材遺体が確認されている。

分析試料は、土壌試料が第5b層で2点、埋没林が確認された砂堆部分の第5層から採取された1点の合計3点である。木材遺体は、第5層中の樹木根および流木から採取された35点と、古代の建物跡

および柵の柱穴から出土した柱材3点および第5a層から出土した材1点である。この中で、樹木根は1袋中に30点入っているが、個体番号が付されていないかったため、便宜上、1-30の通し番号を付した。

3) 分析方法

i) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法で行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。また、北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与え、計算させる。

ii) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛：比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数よりハンノキ属を除いた数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

iii) 大型植物遺体分析

土壌試料は砂質で、植物遺体の含量が少なかった。そこで、定法の4倍増にあたる800ccを秤量して水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣をシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子などを抽出する。種実の形態的特徴を、所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑[石川茂雄1994]、日本植物種子図鑑[中山至大ほか2000]等と比較し、種類を同定し、個数を求めた。微細片を含み個数推定が困難である種類を、「+」と表示した。分析後の植物遺体等は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

iv) 樹種同定

木材は、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル(抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

4) 結果

i) 放射性炭素年代測定

表6 放射性炭素年代測定結果

試料	試料の質	種 類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
第5a層の木材	木材片	マツ属椎葉管束亜属	1210 $\pm$ 40	-30.16 $\pm$ 0.83	1300 $\pm$ 30	IAAA-32101
SP523柱材	木材片	スギ	1430 $\pm$ 40	-25.15 $\pm$ 0.97	1430 $\pm$ 40	IAAA-32102
SP540柱材	木材片	コウヤマキ	1560 $\pm$ 40	-22.21 $\pm$ 0.67	1520 $\pm$ 40	IAAA-32103

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表7 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)						相対比	Code No.
第5a層の木材	1210 $\pm$ 36	cal AD 777	-	cal AD 879	cal BP 1,173	-	1,071	1.000	IAAA-32101
SP523柱材	1426 $\pm$ 39	cal AD 604	-	cal AD 656	cal BP 1,346	-	1,294	1.000	IAAA-32102
SP540柱材	1560 $\pm$ 40	cal AD 436	-	cal AD 538	cal BP 1,514	-	1,412	1.000	IAAA-32103

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用し、表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値である。

結果を表6に、暦年較正を行った結果を表7に示す。暦年較正を行った結果でみると、第5a層から検出された木材の年代値は8-9世紀を示し、発掘所見の年代観と比べてみても調和的である。一方、柱材の年代測定結果をみると、SP523は7世紀、SP540は5-6世紀を示し、発掘所見の年代観(平安時代)と比べると、やや古い値が出ている。

ii) 花粉分析

結果を表8・図34に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。花粉化石群集は、いずれの試料においても類似しており、木本花粉が優占する。群集組成についてみると、ハンノキ属が最も多く産出し、次いでコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が多く産出する。その他の木本花粉では、モミ属、マツ属、スギ属、シイノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。また、わずかではあるが、サジョモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物に由来する花粉化石も認められる。

iii) 大型植物遺体分析

分析の結果を表9に示す。第5b層からは、被子植物11分類群の種実が検出された。その他に、種類不明の種実、木材、炭化材、木の芽、植物のトゲ、部位・種類共に不明の炭化物、昆虫遺骸などの破片が検出された。なお、多量の試料を分析したため、便宜上①と②に分けて記述するが、①はサンブリング地点の西半部、②は東半部におおよそ当る。

検出された種実の遺存状態は比較的良好で、K-1区の第5b層①からは木本5分類群64個、草本4分類群141個と、第5b層②からは木本3分類群20個、草本4分類群57個が同定された。以下に、本分析によって得られた種実の形態的特徴を、木本、草本の順に記述する。

<木本>

表8 花粉分析結果

種 類	和名	学名	調査区・試料名		
			第5b層①	第5b層②	樹木根埋土 川底地山 上面
木本花粉	木本花粉	Arboreal pollen			
	モミ属	<i>Abies</i>	12	5	12
	ツガ属	<i>Tsuga</i>	3	5	5
	マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	2	1	3
	マツ属(不明)	<i>Pinus</i>	9	2	1
	コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	1	4	3
	スギ属	<i>Cryptomeria</i>	16	12	16
	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	6	4	2
	ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	1
	ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	1	-
	サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	-	1	2
	クマシデ属-アサグ属	<i>Carpinus</i>	5	4	3
	ハンノキ属	<i>Alnus</i>	83	111	109
	ブナ属	<i>Fagus</i>	2	3	3
	コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	50	48	40
	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	32	55	46
	クリ属	<i>Castanea</i>	1	1	1
	シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	7	7	4
	ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus-Zelkova</i>	5	3	4
	エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	1	4
	ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	2
	カエデ属	<i>Acer</i>	-	1	-
	トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	1	1
	エゴノキ属	<i>Styrax</i>	-	1	-
	イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-
	トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	1	-
	ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-
草本花粉	草本花粉	Nonarboreal pollen			
	サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	-	1
	イネ科	Gramineae	40	28	36
	カヤツリグサ科	Cyperaceae	15	7	6
	ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	1	-
	クワ科	Moraceae	-	1	-
	キンボウゲ科	Ranunculaceae	1	-	2
	フレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	1	-	-
	バラ科	Rosaceae	-	-	1
	マメ科	Leguminosae	3	3	4
	トウダイグサ科	Euphrasiaceae	-	-	1
	ミソハギ属	<i>Lythrum</i>	1	-	-
	セリ科	Umbelliferae	2	1	2
	シソ科	Labiatae	-	1	-
	ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	13	5	17
	キク亜科	Carduoidae	2	2	2
	タンポポ科	Cichorioideae	-	1	-
	不明花粉	Unknown	14	7	13
	シダ類孢子	Sporos			
合 計	シダ類孢子	Other Pteridophyta	14	12	30
	木本花粉	Total Arboreal pollen	235	272	262
	草本花粉	Total NonArboreal pollen	78	50	72
	シダ類孢子	Total spores	14	12	30
総計(不明を除く)		Total pollen&spore	327	334	364

表9 大型植物遺体分析結果

分類群	科名	和名	学名	部位	調査区・採取層位・ 分析処理量	
					MN02-6	
					第5b層① 800cc 1423.4g	第5b層② 800cc 1499g
木	カバノキ科	ハンノキ属ハンノキ亜属	<i>Alnus</i> subgen. <i>Alnus</i>	果実	6	12
		ハンノキ属	<i>Alnus</i>	果実序	1	—
				果鱗	41	7
本	ブナ科	ブナ科	Fagaceae	果実	2	—
	トウダイグサ科	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Mueller-Arg.	種子	1	—
	ブドウ科	ブドウ科	Vitaceae	種子	—	1
	クマツヅク科	ムラサキシキブ属	<i>Callicarpa</i>	核	13	—
草	オモダカ科	ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A. Br. et Bouche	果実	2	—
	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	Cyperaceae	果実	132	50
	オトギリソウ科	オトギリソウ属	<i>Hypericum</i>	種子	4	2
本	スミレ科	スミレ属	<i>Viola</i>	種子	—	1
	シソ科	イヌコウジュ属	<i>Mosla</i>	果実	3	4
不明種実					—	1
木材					+	+
炭化材					+	+
木の芽					15	1
植物のトゲ					1	—
不明炭化物					+	+
昆虫遺骸					+	+

微細片を含み個数推定が困難である種類を、「+」と表示した。

・ハンノキ属ハンノキ亜属(*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

果実が検出された。茶褐色、広倒卵形～卵状円形で偏平。長さ3.5mm、幅3mm程度。縁に薄い翼があり、翼が欠損する個体もみられる。

・ハンノキ属(*Alnus*) カバノキ科

果実序と果鱗が検出された。黒褐色で木質。果実序は、果鱗、果実が脱落した軸の部分で、完形ならば卵状楕円体。軸の長さ11mm、径3mm程度。軸表面は果鱗の着点が螺旋状に配列する。果鱗は扇形。長さ4～5mm、幅3～5mm程度。基部はやや薄く楔形、頂部はやや厚く反りかえるように突出し、3～5つに分かれて開く。背面は深い縦溝が目立つ。

・ブナ科(Fagaceae)

果実の破片が検出された。茶褐色。破片の大きさ6mm程度。果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。破片はコナラ属、シイ属、クリなどの可能性が考えられるため、ブナ科にとどめた。

・アカメガシワ(*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属
種子が検出された。黒色、歪な球形で径3mm程度。基部にはY字形の稜がある。種皮は硬く、表面に瘤状突起を密布しゴツゴツしている。

・ブドウ科(Vitaceae)

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば広倒卵形で側面観は半広倒卵形、基部の臍の方に向

かって細くなり、嘴状に尖る。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。径5mm程度。種皮は楕状で薄く硬い。属レベルの同定の根拠となる背面が欠損した状態であったため、ブドウ科にとどめた。

・ムササキシキブ属(*Callicarpa*) クマツヅラ科

核(内果皮)が検出された。淡～黄褐色、偏平で卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背面は円みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損してドーナツ状になっている。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

<草本>

・ヘラオモダカ(*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・カヤツリグサ科(*Cyperaceae*)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。淡～茶褐色。三稜またはレンズ状倒卵体。径1.5～2.5mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく個体や平滑で光沢のある個体がみられる。スゲ属(*Carex*)と思われる個体を含む。

・オトギリソウ属(*Hypericum*) オトギリソウ科

種子が検出された。黒褐色、線状長楕円体。両端は短い突起状。長さ1mm、径0.5mm程度。種皮は微細で横長の凹点による網目模様が配列する。

・スミレ属(*Viola*) スミレ科

種子が検出された。淡黄～淡灰褐色、広倒卵形。長さ1.5mm、径1mm程度。基部は尖り、頂部には円形の臍点がある。種皮は薄く、表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

・イヌコウジュ属(*Mosla*) シソ科

果実が検出された。茶褐色、卵円形。径1.5mm程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

iv) 樹種同定

樹種同定結果を表10に示す。木材は、針葉樹3種類(マツ属複雑管束亜属・スギ・コウヤマキ)と広葉樹3種類(ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属クスノギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属(*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部付近に垂直樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞、仮道管、樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

表10 樹種同定結果

群 位	遺構名	状 態	樹 類		備 考
			和 名	学 名	
第5b層	細江川支流	流木(丸木)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>	最大直径20cm;年輪数34<
第5b層	細江川支流	流木(丸木)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>	最大直径28cm;年輪数56<
第5b層	細江川支流	流木(丸木)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>	最大直径33cm;年輪数59<
第5b層	細江川支流	流木(丸木)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>	半径10cm;年輪数20<
第5b層	細江川支流	流木(丸木)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>	最大直径22cm;年輪数46<
第5a層	細江川支流	流木	マツ属短葉松亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	
第5層上面	SP543	櫓の柱材	マツ属短葉松亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	
第5層上面	SP540	柱材	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> (Thunb.) Sieb. et Zucc.	
第5層上面	SP523	柱材	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L. f.) D. Don	
第5層	細江川支流	埋没樹	ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	
			ハンノキ属<根材>	<i>Alnus</i> <root wood>	

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的に広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・コウヤマキ(*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急~緩やか、晩材部の幅は広い年と狭い年とがある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ハンノキ属<根材>(*Alnus* <root wood>) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-4個が複合して散在する。幹材に比較して道管および木繊維の細胞壁が薄い。また、道管の分布密度も高くない。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-30細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

5) 考察

i) 細江川支流の植物遺体群集と古植生

今回確認された細江川支流の充填堆積物(第5層)の植物遺体群集は、花粉化石・大型植物遺体・木材遺体において共通する特徴が認められた。各化石群集の特徴について以下に記載する。

花粉化石群集は、流路充填堆積物の第5b層と、砂堆上面に認められた樹木根痕の埋土で確認されている。各地点の花粉化石群集はいずれも類似しており、総花粉・胞子における木本花粉の占める割合が高く、落葉広葉樹のハンノキ属が優勢、次いで常緑広葉樹のアカガシ亜属と落葉広葉樹のコナラ亜属が多産する特徴を示した。この他、木本花粉の種類(分類群)では、スギ属・モミ属などの温帯性針葉樹の種類、シイノキ属、ニレ属・ケヤキ属、エノキ属・ムクノキ属などの広葉樹の種類を伴っていた。このうち、最も多く産出したハンノキ属は、溪谷沿いや河畔、低湿地などに林分を形成する種を含む種類であり、次いで多く認められたコナラ属コナラ亜属や随伴するヤナギ属・サワグルミ属・クマシデ属・アサダ属・エノキ属・ムクノキ属なども同様の環境に生育する種を含む分類群である。草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などが低率で検出される。

大型植物遺体群集は、第5b層について2箇所の地点で得られており、両地点とも概ね類似した産状を示した。種類構成は木本・草本とも単調であった。木本植物ではハンノキ亜属を含むハンノキ属が最も多産し、ブナ科・アカメガシワ・ブドウ科・ムラサキシキブ属などを伴っていた。現在日本に分布するハンノキ属はハンノキ亜属とヤシャブシ亜属に分類される。今回多産したハンノキ亜属には、ハンノキ・サクラバハンノキ・ミヤマカワラハンノキ・カワラハンノキ・ヤハズハンノキ・ケヤマハンノキなどがあるが、調査地点の立地を考慮すると、カワラハンノキやハンノキに由来する可能性が考えられる。草本植物ではカヤツリグサ科が多産し、ヘラオモダカ・オトギリソウ属・スミレ属・イヌコウジュ属が認められた。このうち、ヘラオモダカは水深の浅い場所に生育する小型の水生植物、オトギリソウ属・スミレ属は山野や湿地などに分布する種を含み、イヌコウジュ属は畑地や路傍など

に普通な種を含む種類である。

木材遺体は、第5b層中の流木第5a層中の樹木小片および砂堆上に認められた樹木根痕より得られている。流木は、直径20～30cmの丸木が落葉広葉樹のコナラ節とクスギ節、小片が針葉樹のマツ属複雑管束亜属に同定された。また、砂堆上に認められた30個所の樹木根痕中の木材は全て落葉広葉樹のハンノキ属の根材に同定された。第5b層から出土したコナラ節およびクスギ節の流木5点については、径と年輪数を計測した(表10)。いずれも外側が腐食しているため、正確な年輪数を計測することが困難であり、実際は確認できた年輪数以上の樹齢があるものと考えられる。また、流木5点のうち2点では、樹芯の位置が一方に偏っていた。年輪を数えたと、そのうちの1点では、樹芯を中心に半径を計測すると、最も大きい部分で21cm、最も短い部分で7cmとなる。樹木は、生育地の地形条件や日照条件等により、成長に偏りが生じるが、それを考慮しても差が大きい。年輪を計測すると、半径の最も大きい部分で59本確認できたが、最も短い部分では20本前後しか認められない。もう1点でも最も半径の大きい部分で56本あるが、最も短い部分では24本となる。したがって、これら2点では、半径が短い側で腐食等により失われた年輪があると考えられる。このことから、実際には出土した大きさ以上の径を有していたことが推定される。

上述の花粉化石・大型植物遺体・木材遺体群集の特徴は、いずれも木本植物のハンノキ属が多産することが特徴であった。特に木材遺体は、河床に形成された砂堆上に分布していたものに由来することから、当時の細江川支流内において、ハンノキ属からなる林分が形成されていたことが窺える。大型植物遺体や花粉化石で多産したハンノキ属も、この林分由来のものと推定され、局地的な植生を強く反映した群集となっていることが窺える。ここでのハンノキ属の種については、上記したようにハンノキやカワラハンノキに由来する可能性が考えられる。今回のハンノキ属林の形成過程については、堆積物の層相変化を考慮すると、細江川支流内において、砂礫の堆積が進行する過程で河床の形態が変化し、砂堆が形成され、砂堆上の裸地部分に林分を形成した可能性がある。ただし、小径木であることから、長期にわたって成立していたものではないことが窺える。この林分の構成樹種としてハンノキ属以外の種類が認められていないことも、支流内の土地条件変化と関係している可能性がある。また、流路充填堆積物中の流木の樹種はコナラ亜属クスギ節・コナラ節であった。花粉化石群集でもコナラ亜属はハンノキ属に次いで多産しており、本種類も当時の細江川支流沿いの植生を構成する要素であったとみられる。一方、花粉化石群集においてコナラ亜属と同様に多産したアカガシ亜属は、大型植物化石や木材化石では確認されなかった。アカガシ亜属の仲間、ほとんどが安定した肥沃な土地条件に分布する。これらのことから、アカガシ亜属花粉化石は細江川が開析する上町台地上や後背の山地・丘陵など遠方に分布していたものに由来するものと考えられる。

以上のことから、細江川支流内では、河床の安定した場所(時期)にハンノキ属などの河畔林が形成されており、その下草にカヤツリグサ科やオトギリソウ属・スミレ属などの草本植物が分布していたことが推定される。また、谷斜面などにはコナラ亜属やクマシデ属・アサダ属などの林分も形成されていたものと考えられる。一方、暖温帯の常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素であるアカガシ亜属やシノキ属などは、台地上や後背の丘陵や山地を中心に照葉樹林を形成していたと考え

られ、部分的にモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの温帯針葉樹も生育していたことが推定される。このような植生が成立していた時期は、放射性炭素年代測定結果および出土遺物の相対年代から、古代と推定される。

古代の上町台地の古植生に関する情報は、台地北部の難波宮跡などで一部確認されているが現状では少ない。今回の結果は、そういった点でも貴重である。台地北部の難波宮跡では、花粉分析の結果、前期難波宮期には台地上に温帯性針葉樹と照葉樹からなる植生が形成されており、温帯性針葉樹も目立っていたことが指摘されている[吉川昌伸2000]。一方、上町台地東側、河内台地縁辺の沖積地に位置する長原遺跡では、古墳時代以降の層準において、アカガシ亜属が高率に出現し、スギ属を中心とした温帯性針葉樹の多産する花粉化石群集が確認されている[渡邊正巳2002]。これらの結果は、基本的には類似した傾向を示しており、今回の結果も局地性の強い要素以外の産状は調和的といえる。ただし、低地の花粉化石群集ではアカガシ亜属の出現頻度が高く、台地上の花粉群と異なる点も認められ、平地林の存在も含め今後の検討課題と考える。

ii) 古代の柱材

古代の建物跡に伴う柱材は、いずれも針葉樹でスギとコウヤマキの2種類が認められた。2種類とも木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。スギの耐水性・耐朽性は中程度、コウヤマキの耐水性・耐朽性は極めて高い。スギは直径2 m、樹高40 mに達し、木州・四国・九州の主として水分条件の恵まれた谷筋等に生育する。コウヤマキは、直径1 m内外、樹高35～40 mに達し、福島県、木曾地方、紀伊半島、四国、九州に隔離分布する。紀伊半島では標高600～1,000 mまでの間に多くみられ、モミ、ツガ、ヒノキ、スギ、トガサワラ等の針葉樹、ブナ、トチノキ等の広葉樹と混生する。

上述のように古代の遺跡周辺には、スギ属、コウヤマキ属が分布していたことが推定されており、周辺で木材が入手できた可能性がある。

宮殿・官衙等の建物柱材については、奈良県藤原宮跡および平城宮跡、福岡県大宰府史跡、静岡県御子ヶ谷遺跡の調査結果から、ヒノキが多い傾向が指摘されている[島地謙ほか1980]。しかし、大阪府内では、古代の建物については樹種同定を行った例がほとんど無いため、木材利用状況は不明である。今回の結果から、少なくともスギやコウヤマキが利用されていたことが明らかとなったが、点数が少ないため、木材利用状況を明らかにするためには今後さらに資料を蓄積する必要がある。

第3節 まとめ

本調査では南住古遺跡の古代の集落について、新たな知見を得ることができた。一つは東西方向に長い調査トレンチであったため、これまで遺跡範囲外とされていた調査地西側から飛鳥～奈良時代の掘立柱建物群を検出したことである。もう一つは細江川の支流を検出したことによって、上町台地上の古環境を考えるうえで重要な資料を得たことである。本節ではまとめとして南住古遺跡の西端、殿辻周辺の景観について考えてみることにする。

掘立柱建物群は第Ⅱ章第3節でも述べたように、調査区西端の細江川支流西岸に位置していた。建物群は正方位に沿うものと、細江川支流の地形に沿うものの2群に分けられ、後者には櫓が設けられていた。柱穴や周辺遺構を含めた出土遺物から両者とも飛鳥～奈良時代と考えられたが、建物の詳細な時期差を捉えられなかった。しかし、北東～南西方向の建物群では、柱穴にスギ、コウヤマキ、マツ属複雑管束亜属の柱材が良好な状態で残存しており、その放射性炭素(^{14}C)による年代測定値は $1430 \pm 40\text{y.B.P. (IAAA-32102)}$ 、 $1520 \pm 40\text{y.B.P. (IAAA-32103)}$ であった。出土遺物から得られた時期に比べると少し古い測定結果ではあったが、花粉分析からスギ属、コウヤマキ属の花粉化石が検出されており、周辺で入手可能な木材でもあったことが明らかとなった。建物群の検出状況は集落がさらに西方および南北方向に展開する様相を示しており、古代の集落域が細江川支流の西方に広がっていたことが推測される。

また、細江川支流を埋める層準(第5層)からは、後期旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代草創期の有茎尖頭器をはじめ、縄文土器、弥生土器、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器・土師器が多数出土した。本遺跡と南方の山之内遺跡との間となる支流の上流側は、後期旧石器時代以降人の活動域であったことが推測される。支流が流れ始めた時期は、出土遺物から上町台地形成後の後期旧石器時代以降と考えられる。埋没した時期は、出土遺物から奈良時代もしくは平安時代初頭までと考えられ、支流を埋める堆積層の上部層準(第5a層)から出土した材の放射性炭素(^{14}C)による年代測定結果($1300 \pm 30\text{y.B.P. (IAAA-32101)}$)でも調和的な値が得られた。これまで本調査地付近の細江川支流は南西側からの流れのみと考えられていたが、南東側からの支流が確認された。この河床に残る削痕から後背の集水域から想定される以上の水量が断続的にでも発生していたことが推測される。また、河床でハンノキ属の根の痕とコナラ節とクスギ節の流木が検出され、花粉分析結果とから細江川支流にはハンノキ属などの河畔林が見られ、カヤツリグサ科やオトギリソウ属、スミレ属などの下草が生育しており、支流沿いの斜面にはコナラ亜属やクマシデ属・アサダ属が、上町台地上や後背の丘陵や山地を中心に照葉樹林が広がる景観が推測される。

本遺跡の西方には古代の港「住吉津」が細江川河口付近に推定されており、室町時代(南北朝期)の遺跡として住吉行宮跡や、さらに西には住吉大社旧境内遺跡がある。今回の調査では、これらと直接の関係を示す遺構・遺物は検出できなかったが、イイダコ壺や上錘の出土は西に広がる海との関係を示すばかりでなく、これら古代の施設との密接な関連性を示す遺物としても貴重な資料であった。

(小倉)

引用・参考文献

- 石井陽子・中条武司2000、「長居地下での地層の全体像—自然史博物館地下の地質4—」：大阪市立自然史博物館編『Nature Study』46巻5号
- 石神治1983、「住吉大社境内採集石器について」：『大阪の歴史』第10号 大阪市史編纂所、pp.58—61
- 石川茂雄1994、「原色日本植物種子写真図鑑」、石川茂雄図鑑刊行委員会、p.328
- 市原実2001、「続・大阪層群—古瀬戸内湖水系—」：『アーバンクボタ』第39号 株式会社クボタ、pp.2—33
- 植木久1988、「松本邸建替工事に伴う荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査(SG86—2)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.69—72
- 上田宏範1988、「住吉古墳群」：新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第1巻、pp.374—384
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1982、「南住吉遺跡発掘調査略報(MN80—1)」：『昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.60—68
- 1984、「南住吉遺跡(MN82—2)発掘調査略報」：『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.76—80
- 1985、「沢村邸建設に伴う住吉旧境内遺跡発掘調査(SM83—2)略報」：『昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.45—52
- 1988、「松田邸建築工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM86—60)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.85—87
- 1994、「北村邸建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM93—33)略報」：『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87—95
- 2001、「西浦氏による建設工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN01—14)報告書」：『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.97—100
- 大阪市文化財協会1992、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ
- 1995、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅳ
- 1997、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅴ
- 1998a、「南住吉遺跡発掘調査報告」
- 1998b、「山之内遺跡発掘調査報告」
- 1999a、「山之内遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 1999b、「細工谷遺跡発掘調査報告」Ⅰ
- 2000、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅲ
- 2001a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅵ
- 2001b、「大阪市文化財協会発掘調査報告—1998年度—」、pp.6—7
- 2002、「南住吉遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 2004、「荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 大庭重信1996、「小山邸建築に伴う発掘調査(MN94—16)」：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.119—123
- 小倉徹也2002、「南住吉遺跡の基本層序」：大阪市文化財協会編『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.15—20

- 2003、「古代の掘立柱建物と細江川の支流」：大阪市文化財協会編『篝火』106号、pp.6-7
- 小倉徹也・趙哲清2001、「現代和川流域の低位・中位段丘構成層—大阪市南部の遺跡のデータを中心として—」：『地学団体研究会第55回総会(山形)講演要旨集』地学団体研究会、p.253
- 小倉博之・吉川周作・此松昌彦・木谷幹一・三田村宗樹・石井久夫1992、「大阪府、上町台地南部の台地構成層と地形面の形成時期」：『第四紀研究』第31巻第3号、pp.179-185
- 小田木富慈美2003、「狩人の忘れ物？有蓋尖頭器」：大阪市文化財協会編『篝火』107号、p.6
- 柏原市教育委員会1989、「高井田遺跡」Ⅲ
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-164(『川西宏幸1988』に再録)
- 1988、「古墳時代政治史序説」塙書房
- 京嶋覚1988、「山本氏による共同住宅建設工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN86-40)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.77-83
- 1989、「難波地域出土の土師器とその地域色」：『韓式系土器研究』Ⅱ、pp.12-22
- 久保和士1992、「(4)土師」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第9号、pp.70-75
- 1996、「堀井邸建築に伴う発掘調査(SM94-4)」：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.127-137
- 建設省国土地理院1965、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 古代の土器研究会編1992、『古代の土器1 都域の土器集成』
- 櫻井久之1991、「鉄骨造4階建住宅建設に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN89-25)略報」：『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.149-157
- 1998、「南住吉遺跡の層序」：大阪市文化財協会編『南住吉遺跡発掘調査報告』、pp.7-8
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-268
- 佐原真1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 島地謙・伊東隆夫・林昭三1980、「古代における宮殿・官衙の使用樹種」：古文化財編集委員会編『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会、pp.249-260
- 清水和明1997、「細井氏による建設工事に伴う発掘調査(MN95-20)略報」：『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.169-177
- 鈴木秀典1982、「瓦器碗の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282
- 鈴木三男2002、『日本人と木の文化』、八坂書房p.255
- 瀬川芳則1959、「住吉区の上代遺跡」：『社会科と教育』研究紀要第1集 大阪市立中学校教育研究会社会部、pp.1-8
- 横山洋1986、「南住吉遺跡で発見された7世紀の建物群について」：大阪市文化財協会編『篝火』2号
- 1988、「田中邸建設工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN86-2)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.74-76
- 高橋工1989、「生田邸建設工事に伴う津守庵寺遺跡発掘調査(TM87-3)」：『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.173-187
- 田辺昭三1966、『陶器古窯址群』平安学園考古学クラブ
- 1981、『須恵器大成』角川書店

- 趙哲濟1983、「瓜破・瓜破北遺跡の層序」：大阪市文化財協会編『瓜破遺跡』，pp.17-20
- 1995a、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ，pp.19-34
- 1995b、「本書で用いる層位学的・地質学的視点からの用語」：同上，pp.41-44
- 2000、「瓜破台地東北部の段丘について」：『研究紀要』第4号 大阪市文化財協会，pp.7-16
- 2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」：『大阪100万年の自然と人のくらし』普及講演会資料集、日本第四紀学会，pp.1-16
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000、『日本植物種子図鑑』東北大学出版会，p.642
- 奈良国立文化財研究所1974、『平城宮発掘調査報告書』Ⅵ、奈良国立文化財研究所学報第23冊
- 1976、『平城宮発掘調査報告書』Ⅶ、奈良国立文化財研究所学報第26冊
- 1978、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ、奈良国立文化財研究所学報第31冊，pp.92-100
- 1983、『聖武文化財ニュース』41号
- 藤岡謙二郎1942、「大阪市住吉区遠里小野町弥生式遺跡」：『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第12輯 大阪府，pp.67-80
- 藤田和夫・笠間保夫1982、「大阪西南部地域の地質」：『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所
- 藤森栄一1967、『かもしかみち以後』学生社
- 古市晃・杉本厚典1997、「照ヶ丘矢田遺跡でみつかった弥生時代の大甕」：大阪市文化財協会編『葦火』71号
- 堀田啓一1979a、「住吉周辺の考古学散歩(一)」：『すみのえ』通巻152 住吉大社社務所，pp.27-35
- 1979b、「住吉周辺の考古学散歩(二)」：『すみのえ』通巻153 住吉大社社務所，pp.19-29
- 前田長三郎1930、「遠里小野石器時代遺跡に就いて」：『考古学雑誌』第20巻9号，p.52
- 前田豊邦1983、「住吉大社と周辺の古墳」：『すみのえ』通巻171 住吉大社社務所，pp.51-59
- 宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・柴川旭1998、「大阪東南部地域の地質」：『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』地質調査所
- 横田賢次郎・森田勉1978、「太宰府出土の輸入中国陶磁器についてー形式分類と編年を中心としてー」：九州歴史資料館編『研究論集』4，pp.1-26
- 吉川昌伸2000、「弥生時代から前期難波宮の花粉化石群」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究第11』，pp.217-224
- 渡邊正巳2002、「長原遺跡東北地区における花粉・珪藻・プラントオーバー分析」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東北地区発掘調査報告』Ⅴ，pp.87-96

あ　と　が　き

今回の報告は、2002年に南住吉遺跡の発掘調査報告第2冊を刊行して以降、2年ぶりのものとなった。前回の報告では遺構や遺物は少なかったが、地質学的な検討を行い、南住吉遺跡の基本的な地層の重なりと大阪市南部地域の地層の対応関係を考察するための貴重な情報を提示した。本書では前回に引き続き、地層についてより深い検討を加えるとともに、古代の掘立柱建物群や細江川支流の調査成果や自然環境についての報告を行った。

全国的にみると、昨今は発掘調査数やこれに従事する職員が減少する地域が認められるようになり、発掘調査報告書そのものの刊行体制や質が問われる時期に来ているといえよう。本書についてもこのような厳しい条件の中で作成したもので、十分な検討をなしたとはいえない。大方の忌憚ない御批判をお願いする次第である。

(積山 洋)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- あ 暗色帯(構成層) 6, 46
- い イイダコ壺 5, 27, 58
- 井戸 4, 6, 38, 39
- え 円筒埴輪 3, 19
- お オオツノジカ 1
- か 瓦器 23, 38, 41, 42
- こ 皇朝十二銭 29
- さ 櫓 3, 8, 30, 33, 47, 48, 53, 58
- し 重弧文軒平瓦 27
- 縄文土器 19, 58
- す 鈴 29
- 硯 23, 25
- せ 石鏡 2, 5, 18
- ち 中位段丘(構成層) 14, 43, 47
- 沖積層 9, 43
- て 低位段丘(構成層) 14, 43
- と 東播系須恵器 25
- 土鍾 2, 5, 25, 38, 39, 41, 42, 58
- な ナイフ形石器 1, 2, 6, 16, 58
- ナウマンゾウ 1
- は 白磁 25, 38, 41
- へ 平安神宮火山灰層 1
- ほ 北宋銭 29
- 掘立柱建物 3, 4, 6, 8, 30, 41, 58
- や 弥生土器 19, 30, 39, 58
- ゆ 有葉尖頭器 6, 16, 58

〈地名・遺跡名など〉

- う 上町台地 1, 2, 4, 46, 47, 56~58
- 上町断層(帯) 1
- お 遠里小野遺跡 2~4
- か 河内平野 1
- し 莊厳浄土寺境内遺跡 3, 4
- す 住吉大社旧境内遺跡 1, 3, 58
- つ 津守庵寺 4
- て 帝塚山古墳 2
- 寺岡砦跡 1
- 照ヶ丘矢田遺跡 2
- な 長原遺跡 6, 57
- に 西大阪平野 1
- は 波食岸 1
- ふ 佛念寺山斯留 1
- ほ 網江川(支流) 1, 4, 8, 14, 16, 19, 30, 38, 46, 47, 55, 56, 58
- や 矢田部遺跡 2
- 山之内遺跡 1~6, 27, 58

**Archaeological Report
of the
Minami-Sumiyoshi Site in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Prefectural Apartmenthouse complex

May 2004

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbol is used to represent archaeological features, in this text

SA : Palisade or Fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole

SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Acknowledgement

Explanatory notes

Chapter I Site Location and Outline of the Preceding Investigations	1
S.1 Site Location and Outline of Topography in Osaka	1
S.2 Results of the Preceding Investigations	5
Chapter II The MN02-6 Excavation	7
S.1 Background and Progress of Research	7
S.2 Stratigraphy / Features and Remains	9
1) Alluvium	9
2) Lower Terrace Formation	14
3) Middle Terrace Formation	14
4) Artefacts from each stratum	16
S.3 Features and Remains	30
1) Features until the Nara Period	30
2) Features from the Medieval to the Modern Period	38
3) Artefacts excavated from the archaeological features	39
Chapter III Discussion of Excavated Features and Remains	43
S.1 Re-examination on the Standard Stratigraphy of the Minami-Sumiyoshi Site	43
S.2 Natural Scientific Analysis	47
1) Introduction	47
2) Outline of the stratigraphy at the investigated area and sampling	47
3) Method	48
4) Results	48
5) Discussion	55
S.3 Conclusion	58
References	59
Postscript / Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

The Minami-Sumiyoshi Site is located in the southwest of Osaka City, which bears archaeological remains from the Palaeolithic Period through the Edo Period. The area around the site was dramatically prospered after the late 6th century or the 7th century. This is due to the development of "*Sumiyoshi-zu*," a major ancient port assumed to have been located at the mouth of the Hosoe-gawa River, west of the Sumiyoshi-taisha Shrine and "*Shihazu-michi*," one of the ancient trunk roads to Yamato Region overlapping with present Nagaikouen-dori Street. Moreover, the Sumiyoshi-taisha Shrine and the neighbouring ancient temples must have been closely related to the development of this area even though the dates of their establishment were not yet identified.

The excavated area is situated at the southwestern edge of the Minami-Sumiyoshi site. The Tsumori Ruined Temple Site is located on its west, where the roof tiles from the Hakuho Period (from the mid 7th century to the early 8th century) had been excavated before. The excavation unearthed the artefacts from the Palaeolithic through the Edo Period, which confirmed the site had been occupied for long time. It is notable that this excavation (MN02-6) discovered groups of post-hole type buildings dated from the Asuka to Nara Period and the branch of the Hosoe-gawa River.

The post-hole type buildings from the same period had also been excavated from another preceding excavation, about 500 metres north of the excavated area of MN02-6. We should further investigate whether or not the groups of post-hole type buildings from the MN02-6 excavation had been related to the site at the north forming a large scale settlement, or to the Tsumori Ruined Temple Site.

Furthermore, several natural scientific analyses were undertaken on the plant remains and the soil samples collected from the area around the Hosoe-gawa River branch. According to the results of those analyses and archaeological investigations, the branch must have been buried by the Medieval. It was also revealed that the area was marshy and surrounded by the alder woods, contemporary with the post-hole type buildings. Many herbal plants were growing in the river branch, and thus, we believe that the water was hardly flowing there except when it rained.

As above discussed, we obtained significant information on the ancient settlement distribution and natural environment at the Minami-Sumiyoshi Site through this excavation. We shall continue to further investigate prosperity and decay of the ancient settlement in this area, including the surrounding sites.

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみすみよしせきはつくつちようさほうこく3							
書名	南住吉遺跡発掘調査報告Ⅲ							
編著者名	小倉徹也・小田木富慈美・京嶋覚・黒田慶一							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2004年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みなみすみよしせき 南住吉遺跡	大阪さかしすみよしく 大阪市住吉区 森辻1丁目	27120	—	34° 36′ 25″	135° 30′ 30″	20030311～20030724	1715㎡	大阪府住宅供給公社による 建設工事に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
南住吉遺跡	集落	旧石器～近世		掘立柱建物・溝・溝井戸・土壇		石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦銭貨・銅製鈴		

圖 版

中央部北壁地層断面

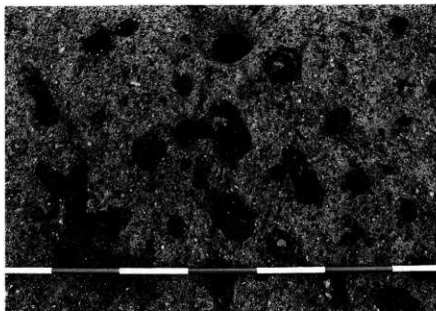


東端部深掘りトレンチ
北壁地層断面



細江川支流内の流木および
樹木根痕検出状況
(北東から)





細江川支流河岸の樹木
根痕検出状況



古代の遺構
〔西から〕



SB501
〔北から〕

SB504検出状況
(北から)



SP523柱材検出状況
(西から)



SP540柱材検出状況
(南から)





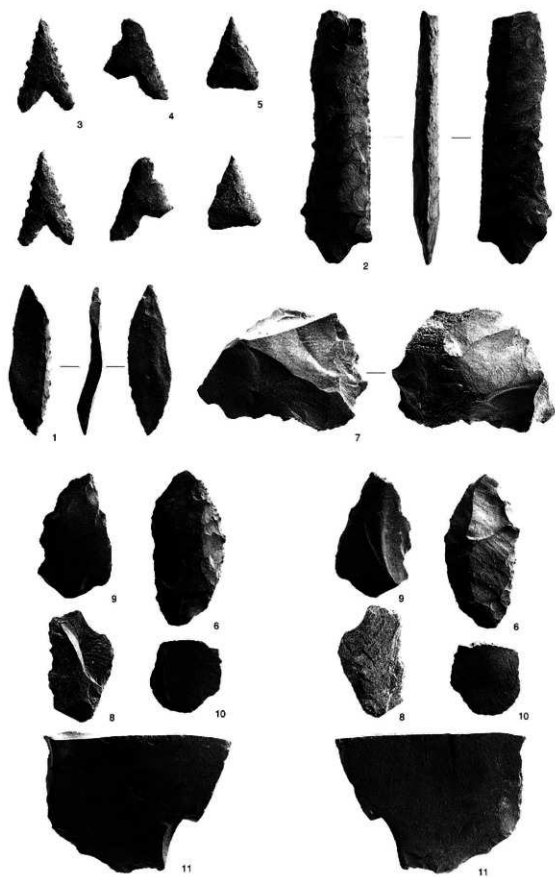
第5a層上面江戸時代の
遺構完掘状況・古代の
遺構検出状況
(西から)



第4a層上面江戸時代の
遺構検出状況
(東から)



SK401完掘状況
(西から)



第4biii層(2・5・6・8)、第5a層(1・3・4)、第5b層(10)、不明(7・9・11)



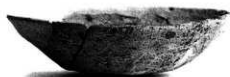
205



17



15



111



110



16



208



31





22



50



23



46



44



32



53



84



60



83



54



68



81



79



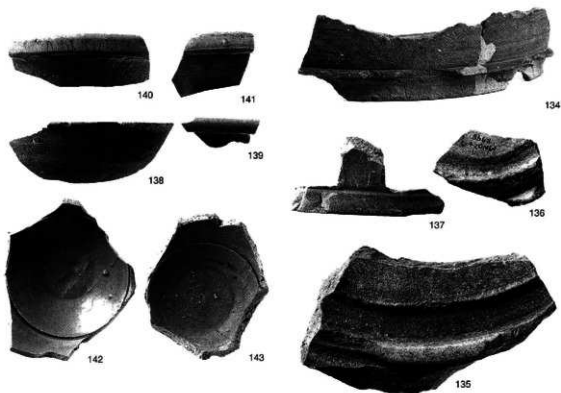
82



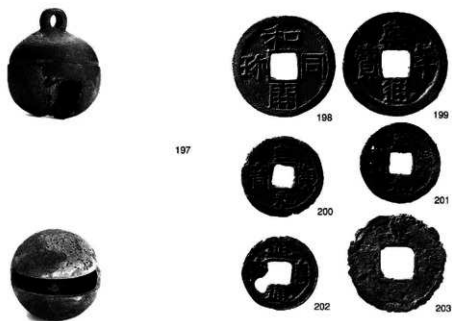
78



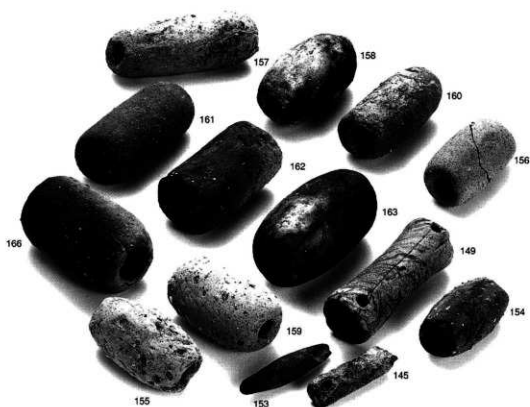
144



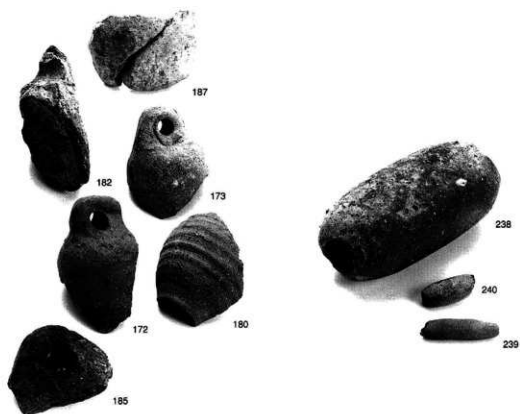
第4biii層(138)、第4bii層(134・137・140・141)、第4層(135・139・142・143)、第3～4層(136)



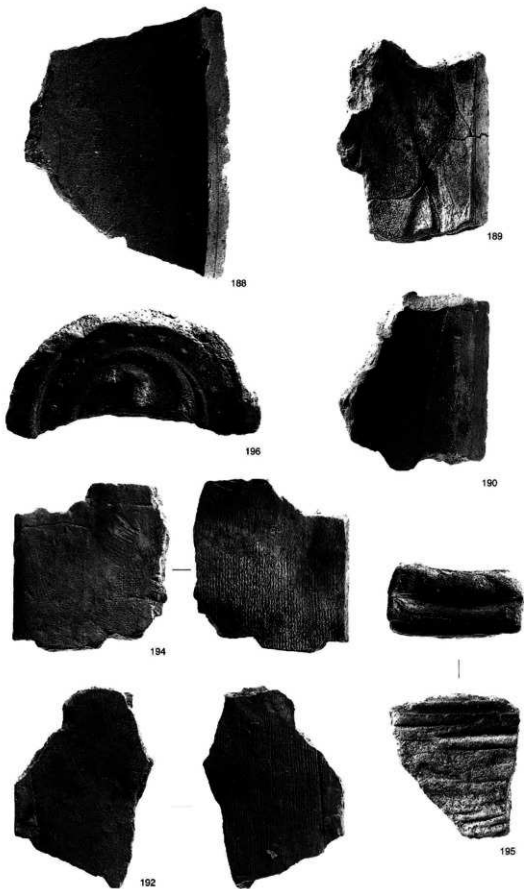
第4b層(197)、第4biii層(199～201)、第4層(203)、第5a層(198)、第5b層(202)



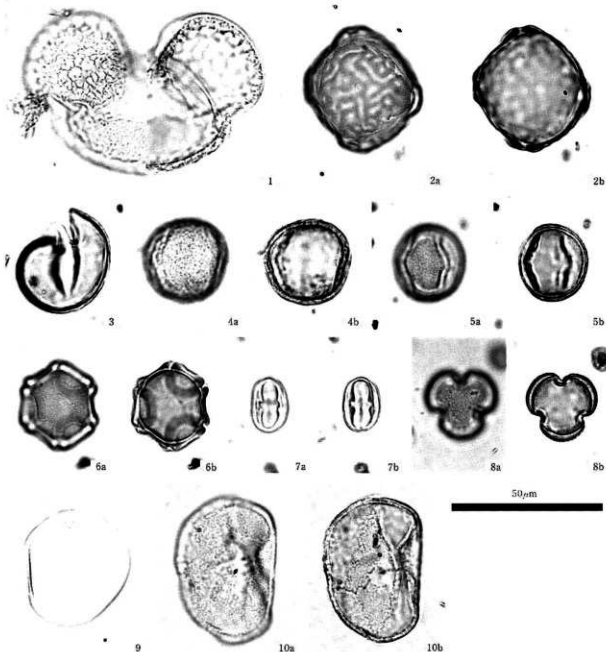
第3層(163)、第4層(154)、第4bii層(158)、第4biii層(149・155・157・159~162)、
不明(145・153)、第5b層(156・166)



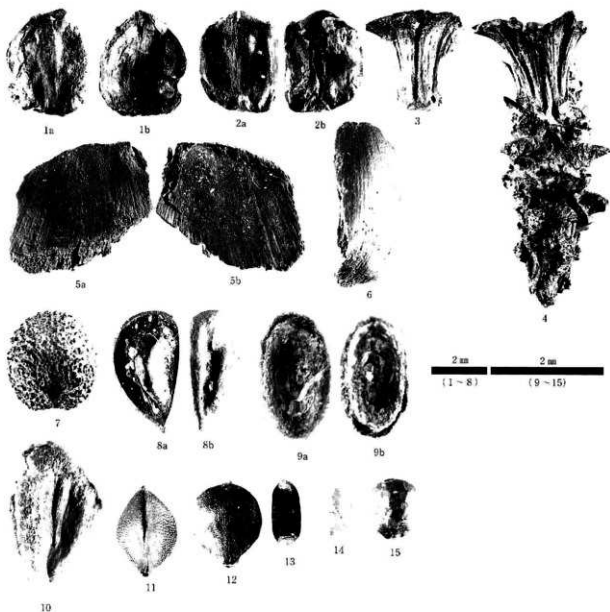
第4biii層(172・180・185)、第4層(182)、第3~4層(173・187)、SD403(240)、SK401
(239)、SX401(238)



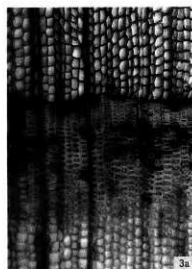
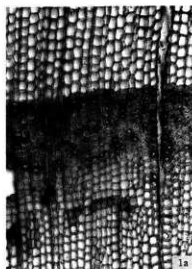
第0層(196)、第3層(194)、第4bi層(195)、第4bii層(190・192)、第4biii層(188・189)



- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. マツ属(第5b層①) | 2. ニレ属—ケヤキ属(第5b層①) |
| 3. スギ属(第5b層①) | 4. コナラ属コナラ亜属(第5b層①) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属(第5b層①) | 6. ハンノキ属(第5b層①) |
| 7. シイノキ属(第5b層②) | 8. ヨモギ属(第5b層①) |
| 9. イネ科(第5b層①) | 10. カヤツリグサ科(第5b層①) |



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. ハンノキ属ハンノキ亜属 果実(第5b層②) | 2. ハンノキ属ハンノキ亜属 果実(第5b層②) |
| 3. ハンノキ属 果鱗(第5b層①) | 4. ハンノキ属 果実序(第5b層①) |
| 5. ブナ科 果実(第5b層①) | 6. ブナ科 果実(第5b層①) |
| 7. アカメガシワ 種子(第5b層①) | 8. ブドウ科 種子(第5b層②) |
| 9. ムラサキシキブ属 核(第5b層①) | 10. ヘラオモダカ 果実(第5b層①) |
| 11. カヤツリグサ科 果実(第5b層①) | 12. カヤツリグサ科 果実(第5b層①) |
| 13. オトギリソウ属 種子(第5b層①) | 14. スミレ属 種子(第5b層②) |
| 15. イヌコウジュ属 果実(第5b層②) | |



1. マツ属複維管束亜属(第5a層)

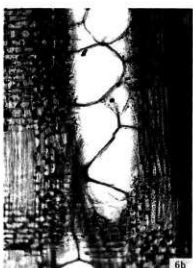
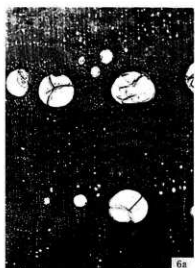
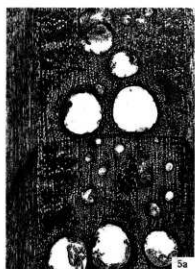
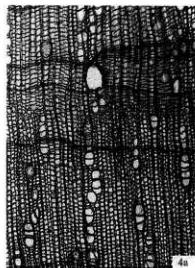
2. スギ(SP523)

3. コウヤマキ(SP540)

a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μ m: a

100 μ m: b、c



4. ハンノキ属(20)
5. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(第5b層 流木)
6. コナラ属コナラ亜属コナラ節(第5b層 流木)
a : 木口、b : 柃目、c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

大阪市住吉区 南住吉遺跡発掘調査報告Ⅲ

ISBN 4-900687-82-0

2004年5月31日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒558-0004 大阪市住吉区长居東3-4-17

**Archaeological Report
of the
Minami-Sumiyoshi Site in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Prefectural Apartmenthouse complex

May 2004

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Minami-Sumiyoshi Site in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Prefectural Apartmenthouse complex

May 2004

Osaka City Cultural Properties Association

『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅱ 正誤表

頁	行など	誤	正
10	表 2	↓ SD401・402、405、406	↓ SD401・402
59	13	「沢村邸建設に伴う住吉旧境内遺跡・・・」	「沢村邸建設に伴う住吉太社旧境内遺跡・・・」
59	32	『荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』Ⅱ	『荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』

